

# 新義真言宗田舎本寺大悲願寺と

## その門末に関する基礎的研究

日暮 義晃

〔キーワード：①近世新義真言宗寺院〕

### 一 本稿の目的

東京都あきる野市横沢に金色山吉祥院大悲願寺という寺院がある。近世においては末寺・門徒あわせて三二カ寺を抱える田舎本寺で田舎談林でもあった。大悲願寺には古文書約一万点と典籍等一万点が保存されている。これらを用いた研究には、『東京都西多摩郡五日市町大悲願寺所蔵調査報告（上） 古文書編』（東京都教育委員会一九九四）に掲載された三本の論文、石井道郎氏「日記が語る寺の暮らし」、清水浩氏「朱印状の授受をめぐる記録」について、河野朝子氏「大悲願寺歴代住職プロフィール」と『東京都西多摩郡五日市町大悲願寺所蔵文化財目録（下） 典籍・絵画編』（東京都教育委員会一九九五）の坂本正仁氏「大悲願寺の歩みと所蔵典籍

のあらまし」、宮田満氏による「近世の村の寺の役割について」(『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』刀水書房一九九四)がある。また、大悲願寺には、大悲願寺の住持法輪房慈明とその跡を継いだ義現房法明による天明五年から文化十四年までの記録(史料には「萬記録」との表題がついている)が残されており、五日市郷土館より『大悲願寺日記』として刊行されている<sup>1)</sup>。この『大悲願寺日記』には、五日市古文書研究会の方々が調べられた詳細な註と問題が付され、全文を書き下した資料集となっている。

石井氏は「萬記録」の内容を紹介され、清水氏は嘉永七年の朱印状改めを紹介され、河野氏は大悲願寺歴代住持について概観されている。また、坂本氏は大悲願寺の由緒について考証され、近世以前の寺伝は享保十八年(一七三三)入院の如環ら歴代住持らによつて創られた部分があるとされた。また、宮田氏は大悲願寺と檀家との係わりを檀頭の史料も用いて新興の家と旧家との村内の格式をめぐる対立から描かれている。

以上大悲願寺文書を用いた研究を簡単に紹介したが、基本的な事実関係や基礎データなどの蓄積が少ないのが現状である。本稿では今後の分析に備え、基礎的なデータの紹介を行つてゆきたいと思う。

簡単にはあるが近世新義真言宗史の研究動向について整理しておきたい。まず、櫛田良洪氏による『真言密教成立過程の研究』と『続真言密教成立過程の研究』が先駆的な研究として重要であろう<sup>2)</sup>。真言宗と新義真言宗教団について古代から近世までを扱った研究である。教義についても論じられている。近世新義真言宗教団が成立し、発展する過程や新義教団の組織や制度について述べられ、教団の構造や智積院と長谷寺といった教相本寺の関係、さらに護国寺がどのように教団内に位置付けられていったのかなどをまとめられている。分析手法は、組織や制度について本山や触頭レベルでの規定や法度類を中心に論述するというものである。また、田舎本寺の本末関係や談林をめぐる問題、移転寺の議論を通じて田舎本寺と教相本寺の関係なども論じら

れている。

ほかに本山や本寺を扱った『智積院史』などの寺史もある<sup>3)</sup>。『護国寺史』・『長谷寺略史』では、坂本正仁氏がその本末関係や開帳など様々な事例を紹介されているが、特に近世の新義真言宗教団と政治権力との係わりを分析されている点が重要である<sup>4)</sup>。宇高良哲氏による近世初頭の関東の仏教教団に関する研究にみられる新義真言宗触頭についての分析も近世新義教団のあり方を示し重要であろう<sup>5)</sup>。

このように近世新義真言宗史についてみると制度史や近世初頭の政治史、教相本寺や護国寺といった上位の寺院と政治権力の関係などについて一定の蓄積があるといえよう。

また、寺院の分布状況を地誌などから調査した数量分析の成果によれば、関東では新義真言宗寺院が多くみられるとされる<sup>6)</sup>。以上の点から関東の仏教史を考える上でも、新義真言宗史の空白部分を埋める上でも大悲願寺門末を通じ、在地の新義真言宗教団について論じる意義が見いだせよう。

こうした研究状況の中で、朴沢直秀氏は、関東農村の寺院（法眼寺・延命院）の檀家集団の構造と寺院経営の関わりを研究され、「地方教団組織」という概念を示し安房の新義真言宗教団組織などを分析されている<sup>7)</sup>。ほかにも薬王院文書を用いた共同研究『近世高尾山史の研究』では田舎本寺とその門末に関する多様な論点を示されている<sup>8)</sup>。しかしながら、地域差などふまえれば研究が多いとはいえないのが現状で今後も在地の教団の具体像を描き事例を蓄積する必要があると思われる<sup>9)</sup>。

村落史の分野でも在地寺院と村との関係が分析され、村落で寺院がはたした役割などを論じられている。しかし教団組織についての研究蓄積が少ないため、その評価の意義付けが難しいように思われる<sup>10)</sup>。

## 二 地域的な特徴

### 関東新義真言宗教団の特徴

関東新義真言宗教団の特色について先にあげた櫛田良洪氏や宇高良哲氏・坂本正仁氏・朴沢直秀氏の研究成果にもとづき簡単にまとめておきたい。

まず、新義真言宗の本末関係についてみると、大本寺（上方本寺）と中本寺（田舎本寺）との法流相続による本末関係と、さらに田舎本寺とその所在地周辺の寺院との間に結ばれる二系統の本末関係があった。田舎本寺を中心とした在地での本末関係は、上方との法流による本末関係より先に室町時代後半には成立していたとされ、各田舎本寺は末寺・門徒の住職任免権を持ち、各種法会への出仕の義務を課していた。一方、法流による上方との本末関係は、戦国期後半頃に田舎本寺が、田舎での本寺としての地位を固めていくために、法流による上方本寺より受けることで成立していったとされる。法流による上方との本末関係は、住職の任命権や法会への出仕など実際の支配は伴わないものであった。

大悲願寺は、醍醐三宝院（上方本寺）の法流上の末寺である中本寺であった。醍醐三宝院の流派を受け継いでいたため、三宝院末とされ、大悲願寺の住職は、先住から大悲願寺に伝わっている三宝院流の伝授を受けなければならなかった。大悲願寺の末寺は、大悲願寺からこの法流の伝授をされた寺院である。法流を授かっていない寺院は門徒とされた。法流は寺へ付属されるため、仮に門徒寺院の住職が法流の伝授を受けていたとしても、門徒寺院への附法が無ければ引導などの作法を行えなかった。門徒という格は、本山への願い出によって昇格されることもあった。

さらに近世の真言宗教団は、修学した教学（教相）によって編成されていたため、新義教学を学んだ僧侶が止住すると新義真言宗寺院となり、古義教学を学んだ僧侶が止住すると古義真言宗寺院となるとされた。大悲願寺の場合、教義上の本寺は、長谷寺と智積院であった。新義真言宗の僧侶となるには真言宗僧侶として行う修行（四度加行など）のほかに学問修行をする必要があった。田舎談林と教相本寺あわせて二十年の学問修行を経ると教相本寺から住持の免許が下りた。ただし、住持としての資格を与えるだけで、僧侶の身分を保障するのは田舎本寺を中心とした地方教団組織と田舎談林であった<sup>11)</sup>。関東の新義真言宗教団は、一つの本山のものと諸寺院がまとめられているのではなく、各田舎本寺を中心とした教団組織が分立していたということになる<sup>12)</sup>。

武蔵国の田舎本寺数と規模を示すため、寛政期の本末帳から武蔵国の田舎本寺が抱える末寺・門徒数、朱印地高を表一にまとめてみた。田舎本寺の配下にある本寺（小本寺）とその末寺は田舎本寺の末寺とした。

表一をみると末寺を百カ寺以上も抱える本寺がある一方で、全く末寺を持たぬ本寺が四十カ寺あり、配下に一カ寺から十カ寺程度を抱える田舎本寺が三十九カ寺となっている。十一カ寺から二十カ寺・二十一カ寺から三十カ寺・三十一カ寺から四十カ寺の配下を持つ寺院はいずれも二十カ寺程度となっている。

配下に一から四十カ寺程度の寺院を持つ田舎本寺が多数ではあるが、抱えている末寺数や朱印地高は様々で、さらに立地条件や檀家の数などを勘案すれば多様な田舎本寺が存在していたといえる。大悲願寺は朱印地二十石を持ち、末寺と門徒三十二カ寺を抱えている田舎本寺であった。

### 小宮領の寺院分布状況

大悲願寺門末は、拜島熊熊川村にあった真福寺を除き、残りは小宮領に分布していた。真福寺が所在した熊川村も小宮領に隣接していたので、熊川村もあわせて小宮領の寺院と村落について「新編武蔵国風土記稿」より表二にまとめ、さらに小宮領寺院の成立年代を表三に、寺領については表四にまとめた<sup>15)</sup>。

小宮領は、東西十里、南北二里にわたる地域で、村数は五十九カ村、寺院数は一七六カ寺となっている。集計では本寺を持たない個人所有と思われる寺院は除いた。また、大半の村落が秋川流域にあり、陸田・畑・山林が多くみられ、幕領と旗本領がしめる地域であった<sup>16)</sup>。

単純計算で一村あたりに約三カ寺の寺院があったこととなる。小宮領の家数は、合計で五一四〇軒である。「新編武蔵国風土記稿」に軒数記載のなかった村々は、時期が異なるが『日本歴史地名体系十三、東京都の地名』（平凡社）の安政期のデータによった。留所村二十五軒・雨間村百軒・野辺村五十二軒・深沢村二十五軒・入野村三十五軒である。一寺院あたり三十軒程度の檀家数となる。檀家をほとんど持たない場合もあるため目安としての数値である。圭室文雄氏によれば、檀家からの布施のみで寺院の経営をするには、百五十軒程度の檀家が必要とされている。そのためこの地域の多くの寺院が経営を成り立たせるためには、檀家の布施収入以外の収入源が必要であったこととなる<sup>15)</sup>。

### 寺院の宗派別内訳と特色

臨済宗は七十九カ寺あり、そのうち朱印地寺院は十八カ寺、配下に十カ寺以上を抱える寺院は四カ寺であった。新義真言宗寺院は四十九カ寺を数え、朱印地寺院は十六カ寺あり、配下に十カ寺以上を持つ寺院は四カ寺

である。曹洞宗は三十三カ寺で、朱印地寺院は八カ寺、配下に十カ寺以上を持つ寺院は三カ寺。天台宗は十カ寺で、朱印地寺院が七カ寺、配下を十カ寺以上抱える寺院は一カ寺となっている。そのほか、時宗二カ寺、修驗二カ寺、日蓮宗一カ寺がみられる。浄土宗や浄土真宗寺院は見られず、日蓮宗寺院も一カ寺だけで、年具地三反の小規模なものであった。新義真言宗寺院で末寺を抱えている寺院はいずれも田舎本寺である。

寺院の成立年代をみると新義真言宗寺院は、古代から近世にかけて創設されている。臨済宗は、千三百年代から開創され、特に千四百年代から千五百年代に集中している。これは、小和田村広徳寺が千四百年代に、戸倉村光嚴寺が千三百年代に、檜原村吉祥寺が千三百年代に建てられ、その後、後北条氏や在地有力者の庇護を受けて、末寺を増やしていったためであろう。曹洞宗は、千五百年代から千六百年代に多く開創されている。こちらも平井村宝光寺が千四百年代に、大久野村天正寺が千五百年代に建てられ末寺を展開していったことによる。天正寺末寺には北条氏照との由緒を記しているものが見られ、臨済宗と曹洞宗の寺院は、後北条氏との係わりで末寺を増加させた面があったらしい。関東地方では、新義真言宗寺院が多く、次いで曹洞宗が多いとされるが、小宮領に関してみると、臨済宗寺院が特に多いといえよう。ただし朱印地寺院や配下に十カ寺以上抱える寺院は新義真言宗もさほど変わらず、禅宗系と密教系の優勢な地域であったと考えられる<sup>16)</sup>。

寺院の規模についてみると、朱印地寺院が五十二カ寺あり、残りはほぼすべての寺院に除地の所有を確認出来る。除地の面積は表四に見られるように、五反以下のものが大多数であった。なお表には反映していないが、なかでも二反から一反弱の寺院が特に多い。表五は、享保六年（一七二二）「寺社堂領高并御除地反別并人数帳」という大悲願寺と末寺・門徒の朱印地・除地などが書き上げられた史料より作成した。表二の約百年以前のデータで面積に多少の相違があるが、これには除地Ⅱ境内として記載されている寺院がほとんどとなってい

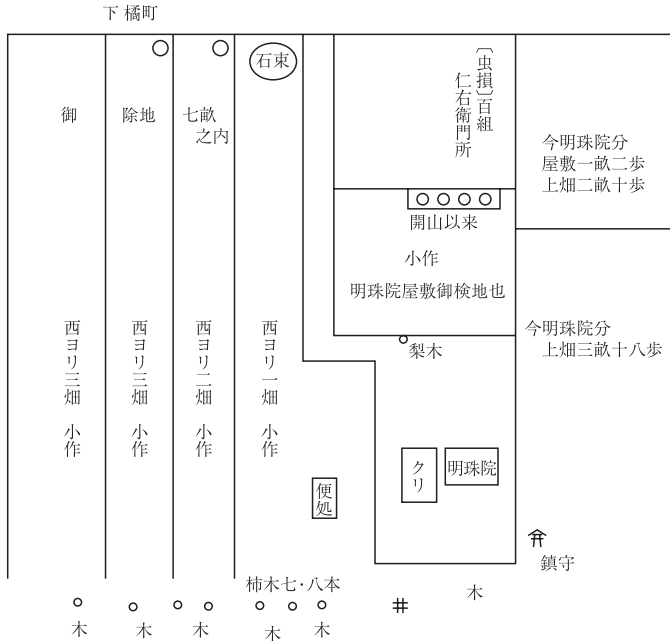


図1 F26-3-② (寛永二年 明珠院絵図)

る。また、寛延二年（一七四九）の檜原村門徒明珠院の絵図（図一）と寛延四年「明珠院付畑帳」から作成した表六を見ると除地七畝十四歩は七畝の畑と庫裏・本堂の十四歩とに分けられて利用されていたことが分かる。檜原村門徒長福寺の明治十三年（一八八〇）の庫裏・本堂（図二）をみると本堂は八畳で庫裏が三畳となっている。十四歩 $\parallel$ 十四坪 $\parallel$ 二十八畳であるから明珠院の庫裏・本堂も同様の規模の寺院と思われる。境内地というと本堂や庫裏などの諸施設がたてられた土地をイメージしがちであるが、小規模な除地を所有するこの地域の寺院は、明珠院や長福寺とほぼ同様の形態で、除地 $\parallel$ 境内地が畑などに利用されていたのではなからうか。一方、朱印地を所持し天明期に末寺へと昇格を果たした大光寺は図三のような様子であった。



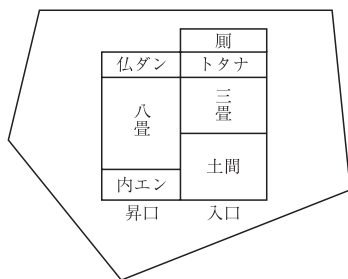


図2 F25 - 35 - ③（明治十三年カ 長福寺絵図）

## 小括

大悲願寺と周辺の寺院群について限られた範囲であるが概観してみた。末寺の分布状況や地所の所有、檀家数など禪宗系の寺院も真言宗と類似の存在と仮定することも出来るのではなからうか。禪宗寺院の研究が少ない現状で大悲願寺門末の事例は武蔵地域の寺院事例として普遍性も持たせられると考える。

## 二 大悲願寺門末の概要

大悲願寺は、横沢村の五日市街道沿いの横沢丘陵の中腹に存在していた。横沢村は田二十四石余・畑二十五石余の村落で最初幕領で後に小田原藩領となった。二十石が大悲願寺領であった<sup>17)</sup>。

大悲願寺の檀家は時期によって多少の変動があるが、約百軒程であった。内訳は、享保期の史料によれば、伊奈村に五十四軒・館谷村に四軒・上川口村に六軒・三内村に三軒・横沢村に三十二軒と大悲願寺の門前百姓（何名か不明）であった<sup>18)</sup>。伊奈村と横沢村を中心に周辺村落に分布していたことが分かる。檀頭は、横沢村名主野口家のほか、伊奈村で寛政期まで名主を務めていた石川家と伊奈村で組頭であった大福家・河野家、神職の宮沢家と三内家の合計六家で六人衆と呼ばれていたという<sup>19)</sup>。石川家は寛政期まで代々伊奈村で名主を勤

めていたが、寛政期に村政に変動があり、二十軒の組頭層による年番制へ変化があったとされる。河野家と大福家は伊奈村の組頭を勤めていたが、大福家はこの村政の変動の後、名主に就任したこともあった<sup>(20)</sup>。宮沢家は伊奈村岩走神社の神職で、三内家も三内村三宮三内明神社の神職であった<sup>(21)</sup>。大悲願寺は檀家数百軒程度であるが、周辺村落の有力者を檀頭としていた。

大悲願寺は末寺・門徒合わせて三二カ寺を抱えていた。配下の寺院は、ほぼ小宮領の範囲内に大悲願寺を中心にして分布していた。享保十八年(一七三三)に大悲願寺住持となった如環によって編纂された過去帳の記事などから末寺・門徒の由緒を表七にまとめた。残念ながらこれらは由緒であり、どこまで事実を反映しているのか分らないが、在地の有力者の帰依を請け、大悲願寺住持の隠居所や弟子の止住する寺院として門末を増やしていったという傾向を推測出来るのではないだろうか。

大悲願寺文書のなかで門末の全容を一次史料で確認出来るのは、門末の定め書きが記された延宝四年(一六七六)の「覚」である<sup>(22)</sup>。そこでは又門徒四カ寺を除いた二八カ寺を確認出来る。川口村正福寺のみ無住と記されている。その後の無住などの様子については表八を参照されたい。

元禄十三年(一七〇〇)に円福寺が末寺に昇格し、その後天明元年(一七八一)には高尾村大光寺・川口村大仙寺・伊奈村成就院・熊川村真福寺・檜原村宝蔵寺が、翌天明二年(一七八二)には戸倉村西蓮寺が末寺へ昇格している。さらに弘化三年(一八四六)には正福寺が末寺へ昇格している。このように門徒寺院から末寺への昇格するためには報謝金を本寺へ支払う必要があり、大悲願寺の場合は天明期の事例では三十両であった<sup>(23)</sup>。大悲願寺末寺の間には、末寺の新旧の差と朱印地所持の有無によって序列があり、法要などの座順に反映されていた。古末寺は年番で年預という本寺の補佐役をつとめていた<sup>(24)</sup>。

表八をみると宝暦六年（一七五六）から門徒寺院で無住が目立つようになり、文政五年（一八二二）には半数以上が無住になり、天保十一年（一八四〇）には、門徒寺院のほとんどが無住となっている。

大悲願寺は、新義僧侶の修学の間である田舎談林でもあった。先にも述べたが新義真言宗では住持の資格を得るためには、本山で三年間の報恩講論議へ出席と田舎談林で報恩講論議出席とを合わせ二十年の修学が必要とされていた。田舎談林はこうした僧侶の学問修行の証明も行っていった。大悲願寺が田舎談林となったのは、天正十九年（一五九一）のことで、徳川家康より朱印状を授かり、それより常会の法談を勤め、武運長久の祈祷を行っているとされている<sup>25</sup>。大悲願寺の会下（田舎談林の配下寺院）は、大悲願寺門末以外に、隣村大久野村にあった田舎本寺である西福寺とその門末十一カ寺、細尾光明院・福昌寺・多門院・西光寺・金蔵寺・日輪寺・大智寺・常福寺・スガ尾仙蔵院・草花花蔵院・福生法蔵院があった。西福寺門末寺院には、小谷村東光寺と薬王寺があり、これらは成木安楽寺会下であったとされる<sup>26</sup>。

大悲願寺には、宝暦十一年（一七六一）から明治十四年（一八八一）にいたるまでの報恩講結衆帳五冊（報恩講出席者名簿）が残されており、これより出席者の推移を表九にまとめた<sup>27</sup>。談林の活動状況を窺ってみると、報恩講に参加する僧侶は安永期頃より減少し、寛政期には二十名以下となり、寛政末期から享和期にはさらに減少し十名以下となっている。そして、人数が足りないため報恩講を行うことが出来ず法楽だけの年も見られるようになっていく。大悲願寺会下の僧侶が減少している状況を窺える。これは弟子や新加（初めて論議にくわわるもの）人数が、安永期頃より減少し、大悲願寺会下での僧侶再生産が滞っていたためである。表三と表四より大悲願寺門末と西福寺門末も含めて僧侶の減少を確認出来るのである。

表八には、大悲願寺門末の檀家数も記しておいた。時期によって変動がみられ、不明の寺院もあるが、五十

軒程度が三カ寺で、二十軒前後の寺院がもつとも多く、中には全く檀家を持たない寺院もみられる。

### 小 括

大悲願寺のような田舎本寺が武蔵国には多くあり、それぞれが独自の発展をしていた。大悲願寺は末寺や門徒をあわせて三十二カ寺ほど抱えていたが、宝暦の頃から配下の門徒に無住が目立つようになり、天保期以降には門徒の多くが無住であった。こうした僧侶の減少は報恩講出仕者の動向からも窺うことが出来る。この原因の一つに各寺院の経営が関係していたと考えられる。詳しくは別の機会に紹介したいが、例えば大悲願寺の文政十一年の収入は三百両程度あり、末寺大行寺や真福寺の天保期から幕末にかけての収入は年間十両から二十両程度であった。対して門徒寺院は、長福寺で一分二朱と一貫三百文や東海寺二年間で四両程度となっていた<sup>(28)</sup>。また、僧侶の本山修行の費用は年間七、八両かかっていたようで檀家の少ない小規模な寺院では僧侶の再生産はおぼつかなかったと思われる<sup>(29)</sup>。

### 三 大悲願寺門末の僧侶

#### 本寺大悲願寺住職

大悲願寺の歴代住職については前記の河野朝子氏が「大悲願寺歴代住職のプロフィール」にまとめられている。その内容を表十にまとめた。

中世より近世初期では、上総出生の十一世源尊・十二世源鏡・江州出身の十九世養遍などのように地元以外

を出生地としているものや、後北条氏に従っていたとされる馬場氏の十世有雅や由木氏の十三世海譽・伊奈村名主である石川氏の十四世源譽・伊達輝宗息とされる十五世秀譽のように在地土豪や大名の縁者が住職となっている例がみられる。その後、高麗郡生・隣村大久野村生・都筑郡生などがみえ、元禄期から近村出身者が増え、明治後期から世襲化している。大悲願寺住職の弟子であったものが、末寺などから就任する十八世・二十四世・二十五世などの事例もみられるが、必ずしも大悲願寺門末出身の僧侶や大悲願寺住職の弟子が住持になるわけではなかった。

傾向を整理すると戦国期から近世初頭には在地有力者の縁者が入寺し、その後、師弟間の相続がありながら、他の門末からの就任も行われていたこととなる。

### 大悲願寺門末の僧侶

寛政元年の僧侶人別帳より表十一を作成した。門末僧侶の約九割が地元周辺出身者となっている。本寺大悲願寺と末寺の大行寺・真照寺・円福寺・成就院には弟子を確認できる。ただし、成就院の弟子は道心者と記され、正規の僧侶ではない可能性もある。十カ寺以上が無住で、さらに十九カ寺のうち三カ寺が留守居道心者で一カ寺が隠居となっている。

大悲願寺には門末へ僧侶が入寺する際に提出した証書類を写し取った帳簿が残されている<sup>30</sup>。これらは住職移転時の請書や「人体起立書」（履歴書のようなもの）を集めた帳簿である。請書は延べ八十四点あり、六十一名の僧侶のものである。「人体起立書」は四十一名分あり、表十二にまとめた。大悲願寺門末に入寺した僧侶すべてのデータではないが門末僧侶の傾向を知ることができると考える。

得度の年齢は、十才未滿が十四名、十五才未滿が十五名、それ以上が五名となっている。ほとんどの者が十代で出家している。当時の新義真言宗では、法禰（出家してからの年数）を最低二十年経ていることが住持資格を得るために必要とされており、若年で出家した方が出世には有利であったためと思われる。

出身地をみると多摩郡出身は十七名と最も多く、入間郡・下総・越後・江戸出身が三名、葛飾郡・信濃・陸奥・相模が二名、近江・紀伊・尾張・讃岐・加賀が一名となっている。半数以上が他地域の出身で、越後などの遠方出身者が十名程度である。村方出身者がほとんどだが、武家の出身や町方出身も若干みられる。門末寺院の存在する村からの出家はほとんど見られないが、大悲願寺門末寺院で出家している者は十九名と約半数となっている。表には反映させられなかったが、ほかの史料に大悲願寺門末で出家し住持となった者を確認出来るため、実際はもう少し多いと思われる。しかし、約九割が地元出身者であった寛政期と比べ半数程度と減少している。

得度や加行、灌頂についてみると大悲願寺や門末で済ませている者の割合が比較的多いが、それでも他所で修行を行った者も多く見られる。灌頂は、数名が越後国や千葉で受けているが、ほとんどが近隣である。しかし大悲願寺門末であるとは限らない。新加は談林に初参加したことを示すが、これも大悲願寺で済ませたものは十名程度である。門末を構成する僧侶の過半数が他所の出身であったことが見て取れ、大悲願寺門末に関しては広く僧侶が流入していたといえる。

修学地は小池房がほとんどで智山は二名、高野山が一名だけである。大悲願寺は、寛文四年（一六六四）に入寺した十八世信盛からすべて小池坊出身であることと関連すると思われる<sup>31</sup>。

前述の帳簿から転住事例を表十三にまとめた。残念ながら他の門末からの転入や転出が分かる事例は少なか

つたため、全体の傾向は示せないが大悲願寺門末内での転住の様子はある程度窺える。新義真言宗の僧は、師匠の元で修行をつみ、まず空いている末寺か門徒寺院へ看住として入寺し、住持の資格を得て、そのまま住職となるか格上の寺院へ転住していったとされる<sup>32)</sup>。この表からも十代、二十代で看住として入寺し、門末内を転住している事例がみられる。例えば天保七年に安養寺へ入寺した観月房明連や天保十五年に円福寺へ入寺した智応房惠元などである。先に見た表八では文化期にはほとんどの門徒寺院は無住であった。例えば門徒東海寺への文化四年・文化六年・文化十五年・文政七年・天保五年といった入寺の例を見ることが出来る。これは短期間に住持が交替していたことを示している。

#### 小 括

大悲願寺門末について見た場合、そこへ止住した僧侶は門末内で再生産された僧侶とは限らなかつたといえる。修行などの場所も大悲願寺門末に限らない広い範囲を確認した。特に門徒寺院では頻繁に僧侶の移動があつたようである。こうした門末内に限らない僧侶の移転は、住職人事に対し本寺以外の関与を想定できよう。そしてそのことから本寺の末寺へ対する権限の限界なども想起させられる。また、門徒東海寺のように頻繁に僧侶が移転する場合の檀家や村との関係なども重要であろう。紙幅の関係もあり、これらの具体例の紹介は別の機会に行いたい。

おわりに

本稿では、大悲願寺門末を分析してゆくにあたつての基礎データの紹介を行った。①少なくとも近世後期には大悲願寺門末の門徒寺院の多くは無住であったこと。②門徒寺院をふくむ小規模寺院は転住する僧が多かつたであろうこと。そして僧侶は本末の枠にとらわれないで移転していたこと。③大悲願寺門末寺院の檀家数は二十以下のものが多くみられ、小宮領の寺院の平均に近かつたこと。④小宮領以外の地域でも同様の分析を行うことによつて大悲願寺門末事例を参考に援用できるかもしれないこと。などを指摘しておく。個々の具体的事例については別の機会に報告を行いたい。

注

- (1) 『大悲願寺日記(上)』(五日市郷土館、一九九三)、『大悲願寺日記(下)』(五日市郷土館、一九九四)。
- (2) 楠田良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房、一九六三)同『続真言密教成立過程の研究』(同、一九七八)。
- (3) 『智積院史』(弘法大師御遠忌事務局、一九三四)。
- (4) 『護国寺史』(護国寺、一九八八)、『長谷寺略史』(総本山長谷寺、一九九三)。
- (5) 宇高良哲『近世関東仏教団史の研究』(文化書院、一九九九)。
- (6) 村田安穂『関東における各宗派の動向』(『歴史公論』一一一、一九八五)、坂本正仁『中世後期以降の東国の真言宗』(『地方史研究』四四(四)、一九九四)、伊東多三郎『郡村誌を利用せる廃仏史料統計』(『近世仏教』二(二)、一九六一)、青山孝慈『江戸時代の相州の寺、その数量的側面―高座郡場合―』(『藤沢市史研究』一一二)、同『江戸時代相州の寺院』(『神奈川県史研究』三九・四〇)、同『江戸時代の武蔵の寺院』(『新編武蔵風土記稿』による数的側面)一、二、三、『三浦古文化』三三三、三五、三三六。青山氏の研究は未完らしい。坂本正仁『中世関東における真言宗教団の展開―常陸・北下総の実勝方の場合―』(『日本仏教史学』二〇〇)では新義真言宗の多



さを中世にさかのぼり法流伝播の側面から検討されている。

(7)

朴沢直秀『幕藩権力と寺檀制度』（吉川弘文館、二〇〇四）の第Ⅰ部や第Ⅱ部二章、三章や「在地社会の僧侶集団」〔「寺社をささえる人びと身分的周縁と近世社会」6 吉川弘文館、二〇〇七〕。朴沢氏は田舎本寺を頂点とした球団組織を「田舎本寺とその住職とを頂点とした、個々の寺院本末組織とそれに対応する僧侶集団とを一括りにし」た「地方教団組織」と定義され叙述されている。朴沢氏によればそれは、「①寺院本末組織としては、原則として田舎本寺を頂点とし、法流相統（末寺の場合）や、少なくとも本末帳記載によって固定化された寺院のヒエラルヒーである。②僧侶集団としては、(1)その寺院本末組織に属する寺院の住職や弟子などの集団である。(2)個々の僧侶が、教相本寺である智山・豊山への留学や、四箇寺を通じて申請する色衣などにより身分を保証されつつ、本寺住職の統制を受ける。(3)事例によっては成員が同一寺院本末組織内でのみ止住・転住を行うことを原則とし、少なくとも、新義真言宗教団に属する僧侶でなければ新義真言宗の本末組織に編成された寺院の住職にはなれない、という新義真言宗全体での閉鎖性に規定されていると考えられる集団である」とされる。

(8)

『近世高尾山史の研究』（名著出版社、一九九八）。

(9)

澤博勝『近世の宗教組織と地域社会』（吉川弘文館、一九九九）、同『近世宗教社会論』（吉川弘文館、二〇〇八）、朴沢直秀『幕藩権力と寺檀制度』（吉川弘文館、二〇〇四）などは地域社会と宗教史の接合を目指した研究である。澤氏は、宗教的要素を中心とした社会関係に注目し、地域と宗教の関係を分析し、新たな地域社会像・宗教史の構築を目指されていたように思われる。朴沢氏は、檀家組織と地方教団組織の実態を合わせて分析されている。これらの研究では、地域社会の宗教をめぐる社会構造とその地域の寺院社会の構造をそれぞれ分析し、総合的な社会像を描くことが指向されている。

(10)

村の堂をめぐる寺院と村落の関係を示した今堀太逸氏の「村落寺院の諸相―近世村落における宗教と政治―」（『仏教大学総合研究所紀要別冊「宗教と政治」一九九八。斉藤悦正氏の「近世村社会の『公』と寺院」（『歴史評論』五八七、一九九九）や「村の記録にみる寺院と村社会」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四六、二〇〇一）などの諸研究は村落内ではたした寺院の役割を述べ、寺院経営に果たした村の役割を論じられる。宗派や寺院の位置づけがよく分からないため事例の評価が難しいと思う。仏教史研究の立場から村の中の寺院についてのイメージを提供する必要があるように思われる。

- (11) 前掲、榑田良洪『真言密教成立過程の研究』(一〇六四—一〇六八頁) 寛政十年に脇坂淡路守から役寺へなされた質問の回答に所在の寺院(住持ないし弟子として入る寺院)と談林の結衆帳へ記載されること(田舎談林の配下に加わる)が無ければ風来僧とされ一派の支配から外される旨が記されている。ただし遊学、巡礼、隠居など許可を得ている場合は例外とされた。
- (12) 坂本氏は『長谷寺略史』(一五六頁)で、「東国には同一の教団を共有する教団が存在したともいえる」「法流本末関係は法流本寺と締結しながらも、寺僧の教相修学では新義教学の中心根来寺を教相本寺と仰ぐ」、「支配者から見れば、東国の状況は一個の教団とみなすことができ」との分析をされている。
- (13) 『大日本地誌体系新編武蔵国風土記稿五』(雄山閣、一九二九)同六(雄山閣、九三〇)『新編武蔵国風土記稿』の記述は文政期のものである。記載内容は地域によって若干相違がある。小宮領の寺院は寺領について記載があるが記されていない地域もある。
- (14) 清水恵美子「近世初頭、秋川流域における村落構造の一考察」(『法政史学』38、一九八六)では、上流部の山地(檜原村、乙津村、戸倉村、大久野村など)は山仕事や炭焼き中心で農業が副業で、川が山地から平地へと出る溪口地方(五日市村や平井川溪口の平井村など)は山方と里方の交流場となり、秋留大地上の下流部(山田村、伊奈村、平井村、二宮村、雨間村など)の里方に分類されている。
- (15) 圭室文雄『葬式と檀家』(吉川弘文館、一九九九)。
- (16) 村田安徳「関東における各宗派の動向」(『歴史公論』一一一、一九八五)、坂本正仁「中世後期以降の東国の真言宗」(『地方史研究』四四(四)、一九九四)、榑田良洪「武蔵西多摩溪谷における臨濟禪の発展—檜原村を中心として—」(『仏教と民俗』一、一九五六)。
- (17) 『日本歴史地名大系第十三巻東京都の地名』(平凡社、二〇〇二)。小田原藩領となった時期については、大悲願寺文書B 48「地頭表記録」では天明三年(一七八三)からとされ、「新編武蔵国風土記稿」には安永三年(一七七四)からと記されている。横沢村の記録がないため詳細は不明である。
- (18) 享保十六年七月、「檀家記録」大悲願寺文書I、3、2。以下文書ナンバーのみ記す。
- (19) 宮田満「近世の村の寺の役割について」(『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』刀水書房、一九九四)。
- (20) 『石川家文書目録』(五日市郷土館、一九八七)の解説による。

- (21) 『大福家文書目録』（あさる野市教育委員会、一九九七）の解題による。
- (22) F 1・3。
- (23) F 1・19 「新末願一件」など。こうした門徒から末寺昇格事例については、櫛田良洪氏が『真言密教成立過程の研究』で本末帳からデータを集計され、関東で多く確認出来るとされている。また、宇高良哲氏は『埼玉県史通史編四 近世二』（埼玉県一九八九）で門末秩序や寺格向上の問題として扱われ、吉岡孝氏も『近世寺院における門末秩序と地域の論理』（『近世高尾山史の研究』村上直編、名著出版、一九九八）門末秩序の編成として論じられている。
- (24) 大悲願寺の門末内の法度については今のところ以下の四点を確認できる。延宝四年（一六七六）F 1・3、元禄十六年（一七〇三）F 1・5、宝暦頃のJ 36、天明二年（一七八二）B 25②。法要の際の座順や本寺へ奉仕すべき事柄などがまとめられている。天明二年の金色山条目は同年に末寺が一举に増加したためか特に詳細なものとなっている。
- (25) B・35、寛延四年七月に提出された吉宗の死去に伴う寛永寺へ納経拝礼を願う寺社奉行宛の願書写の中に見られる由緒。
- (26) 大悲願寺の報恩講会下寺院を書き上げた史料は見あたらない。E 1・2の宝暦五年に西福寺住持が勝手に法談を行ったことに対する大悲願寺の訴書によった。
- (27) G 2・①、G 2・②、G 5、G 11、G 14。
- (28) L 4・4、大悲願寺の家計簿。F 3・60大行寺の金銭出入帳。F 2・68真福寺の金銭出入帳。F 25・20長福寺の文政十二年小作取帳簿。F 5・20東海寺の慶応三年金銭出入帳簿など。ほかにも大悲願寺文書に末寺や門徒の金銭出入帳簿がいくつか残されている。
- (29) 天保十二年大行寺住持が初瀬へ登った際の費用が大悲願寺の天保十二年金銭出入帳に記載されている（L 4・5）。また、他の門末事例だが、八潮市立資料館所蔵の清勝院文書510に年欠の登山費用を書き上げた史料がある。約九両の費用が掛かっている。
- (30) 「門末入院後退券」（寛政八年—文政八年、F 1・23）、「門末入院交代券」（文政十年—天保十五年、F 1・34）、「門末入院交代控」（弘化三年—万延元年、F 1・45）、「門末入院交代控」（万延二年—明治三年、F 1・50）。

(31)

十八世信盛と十九世養遍の師は十七世濟養だが、濟養は智山で学問修行をしていた。近世初頭の小池坊と智積院の関係を踏まえる必要がある。

(32)

坂本正仁氏は「近世の出家―新義真言宗僧定山房祐実の場合―」（『大正大学研究論叢』六、一九九八）で近世僧侶が出家し僧侶となる過程などを描かれている。看住とは櫛田良洪氏の『真言密教成立過程の研究』によれば、新義真言宗寺院の住職には談林修学二十年（うち本山で最低三年）の許状が必要であったが、それに満たない者が住職となる場合の肩書きとされる。寺格に応じた色衣着用は四十才以上からの規定もあったが必ずしも守られていたわけではなかったようである。

表1 武蔵国田舎本寺配下の末寺・門徒数と朱印地高

		朱印地石高							
		無し	1-5	6-10	11-20	21-30	31-40	41-50	50-
末寺・門徒数	100-			1	2				
	71-100			1		1			
	61-70			1	1				
	51-60			2	2	1			
	41-50	1		2	4	1			
	31-40	1	2	3	3	1			
	21-30		1	4	10	3		1	
	11-20		5	7	6	3			2
	1-10	26		4	5	2		1	1
無し	40	1	1	1					

表3 小宮領寺院開創時期

	臨濟宗	曹洞宗	新義真言宗	天台宗	時宗
古 代			2	1	
1000-					
1100-	1	1	2		
1200-			4		
1300-	8		2		1
1400-	15	1	2		
1500-	14	10	5	1	
1600-	4	10	2		
1631-	5	4	1	1	
1663-		4	2		

表4 小宮領寺院の寺領

		臨濟宗	曹洞宗	新義真言宗	天台宗	時宗	修験
朱印地	30石以上	1		1			
	~20石	2	1	2	2		
	~10石	7	3	2	2	2	
	~5石	10	4	11	2		
	~1石						
除地	9反以上			1			
	~5反	2	1	2			
	~1反	32	16	18	2	1	
	~5畝	12	5	7	2	1	
	~1畝	7	2		1		
	1畝未満	2					

寺領と言うことで、年貢地のものは除いた。

無年貢地とあるものは、除地と判断した。

臨濟宗で除地1石と記されていたものは除いた。

坪数などで記載されたものは、1歩=1坪で反畝歩へ改めた。

表2 小宮領の村落と寺院

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
高幡村	123	30	不動堂別当金剛寺	智積院末(新)	朱印地三十石、大宝年中(701-704)起立、中興義海建武二年(1335)寂、寺宝平山季重太刀
程久保村	20	25	神明社別当正福寺	三沢医王寺末(新)	社地8畝、開山栄阿法印元禄年中(1688-1704)
平村	191	82	牛頭天王社別当寿福寺	高幡村金剛寺末(新)	社地朱印地7石5斗、元禄頃持徳寺
平山村	406	120	大福寺	由木村永林寺末(曹)	境内見捨地10間×20間、開基平山季重鎌倉期、中興天正期
			宗印寺	由木村永林寺末(曹)	除地5畝、開山一東天樹寛永12年(1635)寂、開基3代で寺号を得る
			徳善院	高幡村金剛寺末(新)	除地1反14歩
大谷村	170	42	龍谷寺	瀧山村少林寺(曹)	除地3畝、開山少林寺4世
			報恩寺	宇津木村龍光寺門徒(新)	除地1反20歩、境内15坪、天正19年(1591)以前開山
石川村	530	120	御嶽社別当西蓮寺	宇津木村龍光寺末(新)	社朱印地7石、境内50坪、開山元周法印
宇津木村	290	52	龍光寺	醍醐無量寺末(新)	朱印地20石、境内1100坪、開山清雅法印応永3年寂
			休全寺	龍光寺門徒(新)	近年焼失、未再建
粟之洲村	176	51	東福寺	高月村円通寺末(天)	除地42坪(境内地)
瀧山村	160	24	少林寺	下栲田村高乘寺末(曹)	朱印地25石、境内3万9百坪余、開基北条氏照、弘治元年(1555)起立
平村	43	15	大蔵院	宇津木村龍光寺末(新)	除地凡3反内境内15坪、開山榮秀(名主3男)元和7年(1621)父菩提のため建立
八日市村	(160)	54			
左入村	210	34			
中野村	77	86	喜福寺	宇津木村龍光寺末(新)	朱印地8石5斗、開山亮慶永享年中(1429-1441)寂
大目村	131	93	安養寺	寺方村宝生寺末(新)	朱印地14石5斗、開山頼鎮栄和3年(1377)寂
			深翁寺	瀧山村少林寺末(曹)	除地1畝10歩、開山少林寺4世寛永16年(1639)寂
戸吹村	102	57	桂福寺	川越連光寺末(曹)	朱印地9石5斗、開山昌誉
			無量寺	高月村円通寺末(天)	朱印地7石1斗、開基浪人八木岡弾正天正期(1573-1592)
			養福寺	高月村円通寺門徒(天)	除地1反8畝
川口村	853	170余	熊野権現社別当円福寺	横沢村大悲願寺末(新)	社朱印地9石7斗、境内3500坪、承久4年(1222)鎌倉右大臣実朝菩提のため建立

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
			白山社別当長楽寺	寺方村宝生寺末(新)	社朱印地9石3斗、境内1890坪、開山明玄法印文治3年(1187)寂
			熊野権現社別当龍正寺	郡中下恩方心源院末(曹)	社朱印地11石5斗社除地2畝24歩、境内20坪、開山天永琳達元和元年(1615)起立
			鳥栖観音堂別当長福寺	寺方村宝生寺末(新)	堂朱印地8石6斗(境内110坪朱印地内)、中興頼永法印
			慈眼寺	寺方村宝生寺末(新)	除地2反6畝3歩、中興長寿寛永10年(1633)寂
			法蓮寺	藤沢清浄光寺末(時)	朱印地10石、開山遊行2世嘉元2年(1304)、甲州武田氏の女が尼になり住す武田氏滅亡後寺領失う
			三光院	高月村円通寺末(天)	朱印地16石(境内1500坪朱印地内)、中興伝燈阿闍梨貞享3年(1686)寂
			大仙寺	大悲願寺末(新)	不動領8石6斗、境内1200坪、建暦2年(1212)建立か
			一重院	大悲願寺末(新)	年貢地200坪、中古より屢々無住
			吉祥院	小和田村広徳寺末(臨)	除地2反5畝、開山玉岫正保4年寂
			寿福寺	小和田村広徳寺末(臨)	除地2反、開山劫林永公永禄5年(1562)寂
			東岳院	戸倉村光巖寺末(臨)	除地8畝、開山天叟天正11年(1583)寂
			如意輪寺	大悲願寺末(新)	除地1反1畝1歩、
			東光寺	大悲願寺末(新)	年貢地境内12間×10間、いつの頃からか無住
			正福寺	大悲願寺末(新)	除地6畝20歩、貞治3年(1364)起立
			慶福庵	戸倉村光巖寺末(臨)	除地3畝21歩
宮下村	233	51	常福寺	瀧山村少林寺末(曹)	朱印地10石除地7畝2歩、開山大宝元和3年(1617)寂
			西林寺	寺方村宝生寺末(新)	除地1反9畝15歩余
留所村	(149)	(25)	宝印寺	高月村円通寺末(天)	朱印地5石、村内鎮守持、開基塚原次左衛門正保以前
本丹木村	315	22	蔵王権現社別当金蔵寺	高月村円通寺末(天)	朱印地25石(社地)
中丹木村		27			石高は本丹木村との合計
高月村	259	60	円通寺	東叡山末(天)	朱印地10石、開山讃海天曆年中(947-957)寂、中興尊泰寛文年中(1661-1673)寂
			大善院	高月村円通寺末(天)	除地6畝20歩、
瀧村		30	不動院	高月村円通寺末(天)	除地5畝3歩、高月村枝郷高月村石高内
小川村	430	93	法林寺	山田村広園寺末(臨)	朱印地25石、境内1200坪、開山円融康応元年(1389)寂
			法清寺	身延山久遠寺末(日)	年貢地3反、
			慈眼院	同村法林寺末(臨)	年貢地

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
			林泉寺	野辺村普門寺末(臨)	除地1反11歩
野辺村	182	(52)	普門寺	鎌倉寿福寺末(臨)	朱印地10石、境内500坪、開山心源希徹応永10年(1403)寂
二の宮村	954	120	玉泉寺	高月村円通寺末(天)	朱印地20石
			光福寺	野辺村普門寺末(臨)	除地2反3畝、開山無染可淨西堂永享年中(1429-1441)寂
平沢村	361	47	広濟寺	鎌倉建長寺末(臨)	除地6反5畝10歩、開山椿山元和3年(1617)寂、開基は当村名主先祖の伝え
			太梅院	当村広濟寺末(臨)	除地2反3畝5歩
雨間村	399	(100)	西光寺	高月村円通寺末(天)	除地1反2畝8歩
			地藏院	野辺村普門寺末(臨)	朱印地10石、開山有泉享徳3年(1454)寂
			常福寺	野辺村普門寺末(臨)	除地1石余、開山宗祥寛永6年(1629)寂
			大仙寺	野辺村普門寺末(臨)	境内年貢地
原小宮村	141	25			
上草花村	360	105	大行寺	大悲願寺末(新)	朱印地13石、塔頭円能寺(堂社無し)
			法泉寺	大悲願寺末(新)	年貢地あり、いつの頃からか無住大行寺が兼務
			陽向寺	小和田村広徳寺末(臨)	朱印地5石
			長泉寺	戸倉村光厳寺末(臨)	除地田1反1畝5歩畑4畝、
下草花村		115	慈勝寺	戸倉村光厳寺末(臨)	朱印地13石、開山黄山徳和大永元年(1521)寂、石高は上草花村に含まれる
			花蔵院	大久野村西福寺末(新)	朱印地5石
川崎村	(362)	129	宗禪寺	小和田村広徳寺末(臨)	境内年貢地1反24歩、開山玉軸正保4年(1647)寂
福生村	(936)	222	清岩院	小和田村広徳寺末(臨)	朱印地10石、開山心源応永10年(1403)寂
			長徳寺	小和田村広徳寺末(臨)	除地9反境内除地、開山木山骨外寛正元年(1460)寂
			宝蔵院	大久野村西福寺末(新)	除地2反5畝
菅生村	93	113	蔵守院	根ヶ布村天寧寺末(曹)	朱印地8石、開山本山6世九山聖重天正12年(1584)寂
			泉蔵院	大久野村西福寺門徒(新)	無年貢地4反、
			福泉寺	小和田村広徳寺末(臨)	除地4反8畝、
			宝蔵寺	平井村宝光寺末(曹)	朱印地5石(観音堂料)、開山泰翁慶初寛永元年(1624)寂
瀬戸岡村	267	50	珠龍院	小和田村広徳寺末(臨)	朱印地10石、除地8畝境内除地、外8畝、開山桃英洞応永33年(1426)寂
牛沼村	150	36	徳重院	鎌倉寿福寺末(臨)	除地田8畝畑3畝、開山梅窓芳西堂文正元年(1466)寂



村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
油平村	154	24	福泉寺	鎌倉寿福寺末(臨)	除地1反1畝13歩境内除地、開山徹堂薰西堂文祿元年(1592)寂
上代継村	249	98	金松院 真城寺	小和田村広徳寺末(臨) 戸倉村光厳寺末(臨)	朱印地8石4斗、開山後林永享2年(1430)寂、開基北条氏政 朱印地7石2斗、開山後庵宗巳大光延文2年(1357)寂、開基北条氏照
湖上村	108	34	東海寺 観音寺	大悲願寺末(臨) 小和田村広徳寺末(臨)	除地1反1畝17歩、境内無年貢地 境内2反無年貢地、開山江印徳西堂嘉吉2年(1442)寂
網代村	41	24	弁財天別当妙台寺	小和田村広徳寺末(臨)	社朱印地5石、開山江印貞治3年(1364)寂、開基足利尊氏、往古寺領500石
山田村	132	87	禪昌寺 瑞雲寺 能満寺 常照寺	小和田村広徳寺末(臨) 小和田村広徳寺末(臨) 小和田村広徳寺末(臨) 同村能満寺末(臨)	除地1反5畝、開山天甫鏡岩享祿元年(1528)寂 朱印地8石、開基鎌倉公方基氏伯母応安4年(1371)寂 朱印地7石2斗、開山心源応永10年(1403)寂 能満寺隠居寺、開山龜齡天文4年(1535)寂
引田村	224	120	真照寺	大悲願寺末(新)	朱印地7石、寛平3年(891)起立、延文元年(1356)鎌倉公方基氏中興の棟札
平井村	582	374	宝泉寺 宝光寺 西光寺 大智寺 日輪寺 金蔵寺 宗剣寺	小和田村広徳寺末(臨) 八代郡広巖院末(曹) 大久野村西福寺末(新) 大久野村西福寺末(新) 大久野村西福寺末(新) 大久野村西福寺末(新) 同村宝光寺末(曹)	除地1反5畝 朱印地10石、境内40000坪余、文明年中(1469-1487)開山 除地1反5畝12歩境内除地、天正年中(1573-1592)以前 除地2反6畝12歩境内除地、中興頼誉寛文5年(1665)寂 除地1反8畝12歩境内除地 除地9反18歩境内除地、明応8年(1499)の古碑 除地田4反3畝6歩境内除地、開山英山文雄元和元年(1615)寂、開基平井氏天正18年寂
			宝樹寺	同村宝光寺末(曹)	除地1反9畝6歩境内除地、開山宝光寺8世永祿12年(1699)寂
			常福寺	大久野村西福寺末(新)	除地2反2畝、開山円秀天正12年(1584)寂、開基村内森田氏先祖
			東光寺	同村宝光寺末(曹)	除地5反8畝8歩、開山鷲州泉鶯寛文5年(1665)寂
			桂岩寺	同村宝光寺末(曹)	除地2反3畝10歩、開山東光寺と同じ
			東光院	同村宝光寺末(曹)	除地1反2畝18歩、
			祥雲寺	同村宝光寺末(曹)	除地1反6畝、開山宝光寺2世永祿11年(1568)寂

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
伊奈村	578	200	保泉院	同村宝光寺末(曹)	除地5畝4歩、開山宝光寺3世天正12年(1584)寂
			明光寺	戸倉村光厳寺末(臨)	朱印地5石、開山星丘集康和2年(1100)寂
			松岩寺	戸倉村光厳寺末(臨)	朱印地5石、除地4反6畝20歩
			普門寺	戸倉村光厳寺末(臨)	除地6畝12歩
			成就院	大悲願寺末(新)	除地9畝18歩
高尾村	76	28	竜性寺	大悲願寺末(新)	除地1反24歩
			大光寺	大悲願寺末(新)	朱印地9石1斗、文龜2年(1502)起立
			法光院	大悲願寺門徒(新)	除地3反2畝、
留原村	166	50	地藏院	大悲願寺末(新)	除地6畝13歩、開山伝秀天正17年(1589)寂
館屋村	42	16	正光寺	川口村法蓮寺末(時)	除地16石5斗
深沢村	34	(25)	真光院	小和田村広徳寺末(臨)	除地2反
三内村	106	62	福寿院	小和田村広徳寺末(臨)	除地1反4畝23歩、境内400坪
横沢村	49	23	多福院	小和田村広徳寺末(臨)	除地1反2畝、
			大悲願寺	醍醐三宝院末(新)	朱印地20石、建久2年(1191)開山
大久野村	996	390	天正寺	根ヶ布村天寧寺末(曹)	朱印地6石3斗、開山広庵天正元年(1573)か永祿6年(1563)寂、境内7500坪余
			妙楽寺	同村天正寺末(曹)	除地8畝、北条氏照の一族により起立
			宝鏡寺	同村天正寺末(曹)	除地1反7畝10歩、開山宗山禪戒宝永6年(1709)寂
			岩井院	同村天正寺末(曹)	除地7畝、開山本寺2世天正14年(1586)寂
			慶福寺	同村天正寺末(曹)	除地3反4畝29歩、開山本寺4世慶長14年(1609)寂
			松沢寺	同村天正寺末(曹)	除地3反3畝3歩、開山直叟重達寛永14年(1637)寂
			慶徳寺	同村天正寺末(曹)	除地9畝24歩、開山驥雲村龍慶長14年(1609)寂
			保寿院	同村天正寺末(曹)	除地4反7畝22歩、開山広庵天正元年(1573)寂
			西徳寺	同村天正寺末(曹)	除地3反7畝3歩、開山涌山林東慶長8年(1603)寂
			長井寺	同村天正寺末(曹)	除地3反8畝6歩、開基北条氏照麾下長井氏、開山広庵天正元年(1573)寂
			清涼寺	同村天正寺末(曹)	除地1反2畝24歩、天正4年(1576)起立
			長泉庵	同村天正寺末(曹)	除地1反2畝8歩、開山涌山林東慶長8年(1603)寂
			光珠庵	同村天正寺末(曹)	除地1反5畝9歩、開山涌山林東慶長8年(1603)寂
			玄珠庵	同村天正寺末(曹)	除地1反7畝9歩、開山驥雲村龍慶長14年(1609)寂

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
			西福寺	醍醐報恩院末(新)	朱印地5石3斗、境内1000坪、中興開山真觀弘安元年(1278)寂
			光明院	村内西福寺末(新)	除地3反、開山真觀弘安元年(1278)寂
			多聞院	村内西福寺持(新)	除地2反6畝20歩、いつの頃から無住
			多福院	小和田村広徳寺末(臨)	除地1反2畝、開山關元透寛永14年(1637)寂
			玄珠庵	村内天正寺持(曹)	除地1反7畝7歩、
入野村	104	(35)	徳藏寺	小和田村広徳寺末(臨)	除地1反5畝、開山栢芳樹天文13年(1546)寂
			深沢庵	小和田村広徳寺末(臨)	除地6畝
五日市村	304	195	開光院	小和田村広徳寺末(臨)	朱印地16石、開山光嶽珊文明12年(1480)寂
			玉林寺	戸倉村光嚴寺末(臨)	朱印地15石5斗、開山明叟哲貞和3年(1347)寂、開基北条庵下檜原城主平山氏
			楞巖寺	小和田村広徳寺末(臨)	除地16歩、開山龍玉虎公天正元年(1573)寂
			玉泉寺	小和田村広徳寺末(臨)	除地1反6畝2歩、開山徳叟慶長19年(1614)寂
			不動院	大悲願寺末(新)	除地5畝15歩
			覚法院	当山派八王子円法院触下	除地7畝14歩
小和田村	49	40	広徳寺	鎌倉建長寺末(臨)	朱印地40石、境内10200坪、開基正応長者、開山建長寺前住心源希徹明応年中(1492-1501)、中興北条氏康
小中野村	77	48	安養寺	大悲願寺末(新)	境内1反8畝10歩水田4畝
乙津村	365	119	龍珠院	戸倉村光嚴寺末(臨)	朱印地9石8斗、開山日峯朝応安4年(1371)寂
			徳雲庵	戸倉村光嚴寺末(臨)	除地2畝21歩、開山雲英台弘治3年(1557)寂
			陽谷庵	戸倉村光嚴寺末(臨)	除地2反1畝2歩、開山天叟宗祐天正15年(1587)寂
			明光庵	戸倉村光嚴寺末(臨)	除地2反21歩、開山月堂座元天正15年(1587)建立
			宝泉寺	戸倉村光嚴寺末(臨)	除地2反1畝19歩、開山恵海座元天正元年(1573)寂
戸倉村	599	137	光嚴寺	臨濟宗	朱印地20石、境内13500坪余、正宗広智が建長寺・円覚寺転住の後創立、応安7年(1374)寂
			神光庵	(光嚴寺末か)	除地2畝
			長福庵	(光嚴寺末か)	光嚴寺境内にあり、開祖愚溪得哲応永12年(1405)寂
			西蓮寺	大悲願寺末(新)	境内除地1反9畝5歩
			普光寺	村内光嚴寺末(臨)	境内除地1反4畝22歩、開山光嚴寺7世延徳3年(1491)寂
檜原村	403	(534)			以下の組は檜原村内

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
本村 上・下組		25・39	吉祥寺	鎌倉建長寺末(臨)	朱印地5石5斗、境内1000坪余、開山広智庵安7年(1374)寂、中興当村名主先祖吉野氏、
			福寿庵院	同村吉祥寺末(臨)	除地9畝10歩
泉沢組		38	法性寺	同村吉祥寺末(臨)	境内除地1反2畝6歩、開山南江泉永禄7年(1564)寂
南谷十組					
柏木野組		21	円通寺	同村吉祥寺末(臨)	除地9畝26歩、開基村民先祖坂本氏嘉吉元年(1441)寂
出野組		19	西光寺	同村吉祥寺末(臨)	除地6畝16歩
下川乗組		18	日蓮寺	同村吉祥寺末(臨)	除地1反3畝2歩
上川乗組		19	浄聖寺	同村吉祥寺末(臨)	除地8畝12歩、開山昌永繁正保2年(1645)寂
和田組		19	玉伝寺	同村吉祥寺末(臨)	除地9畝
事貫組		16	布金寺	同村吉祥寺末(臨)	除地26歩、開山華翁栄西堂天正元年(1573)寂
上平組		16	伝光寺	同村吉祥寺末(臨)	除地8畝20歩
笛吹組		?	涌泉寺	同村吉祥寺末(臨)	境内年貢地3畝15歩
猿屋敷組		18			
数馬組		18	宝積寺	同村吉祥寺末(臨)	除地1反2畝4歩
北谷十組					
中里組		42	長泉寺	同村吉祥寺末(臨)	除地8畝24歩、開山正虎寛永12年(1635)寂
			長福寺	大悲願寺末(新)	除地1反8畝9歩、中興快澄享保20年(1735)寂
			正覚院	本山派木曾村住善寺触下	除地2反4畝25歩
白倉組		18	威徳寺	同村吉祥寺末(臨)	除地7畝10歩、元禄8年(1695)修補
大沢組		17	観音寺	大悲願寺末(新)	除地1反18歩、中興月海明和3年(1766)寂
神戸組		31	徳泉寺	同村吉祥寺末(臨)	除地7畝10歩、開山林叟玉天文6年(1537)寂
小沢					
宮ヶ谷戸組		37	明珠院	大悲願寺末(新)	除地7畝14歩、近き年より無住、同村宝蔵寺持ち
夏地組		20	宝蔵寺	大悲願寺末(新)	除地6畝8歩、開山頼憲寛永年中(1624-1644)の人、永和元年の古碑あり
小岩組		36	東光寺	同村吉祥寺末(臨)	除地3反2畝8歩
			長光寺	同村吉祥寺末(臨)	除地3畝6歩、近き年より廃寺東光寺持ち
笹久保組		13			
沢又組		38	寒沢寺	同村吉祥寺末(臨)	除地2畝
倉掛組		16			

村名	石高	軒数	寺院	本末	備考
養沢村		48	養沢寺	戸倉村光厳寺末(臨)	除地2反1畝8歩
			常光寺	戸倉村光厳寺末(臨)	除地1反1畝5歩
			慈眼寺	常光寺兼帯(臨)	除地1反1畝14歩、近き年廃し再建無し
			伝福庵	常光寺兼帯(臨)	除地1畝18歩
端村寺岡 (拝島領)		12	神谷庵	常光寺持(臨)	除地4畝20歩
			東溪院	戸倉村光厳寺末(臨)	除地1反8畝16歩、開山南溪泉公元和年中(1615-1624)寂
熊川村	493	134	千住院	普濟寺末(臨)	
			真福寺	大悲願寺末(新)	1町20歩
			福生院	普門寺末(臨)	3反24畝

(新)は新義真言宗、(曹)は曹洞宗、(臨)は臨濟宗、(天)は天台宗、(日)は日蓮宗

表5 F1-6 享保6年(1721)「寺社堂領高並御除地反別並人数帳」

寺院名	所在	朱印地	除地 町反畝歩	備考
吉祥院	横沢村	20石	0, 0, 8, 0 畑 社地寺中東福院支配	
大光寺	高尾村	9石1斗	0, 1, 2, 0 畑 不動除地	
円福寺	川口村	9石7斗 熊野権現社領	0, 0, 8, 0 熊野権現社領・影沢小社	
大仙寺	川口村	8石6斗余	0, 1, 0, 8	
東海寺	代継村		0, 5, 8, 11 内 1, 1, 11 境内 2, 6, 0 不動 6, 13 風・山神宮 1, 4, 17 伊勢神明宮	
宝光院	高尾村		0, 3, 2, 0 境内 0, 1, 1, 6 畑 阿弥陀堂	
地藏院	留原村		0, 0, 6, 12 寺中 0, 0, 4, 6 薬師 1, 1, 25 天王	
安養寺	小中野村		2, 2, 10 田畑	
西連寺	戸倉村		0, 1, 9, 5 境内	
長福寺	檜原村		0, 1, 8, 9 境内	
泉蔵寺	川口村		0, 1, 4, 20 境内	
一重院	川口村		0, 1, 3, 2 境内	
如意輪寺	川口村		0, 1, 1, 1 境内	
龍性寺	伊奈村		0, 1, 0, 24 境内	
観音寺	檜原村		0, 1, 0, 18 境内	
成就院	伊奈村		0, 0, 9, 18 境内	
明珠院	檜原村		0, 0, 7, 14 境内	
正福寺	川口村		0, 0, 6, 20 境内	
宝蔵寺	檜原村		0, 0, 6, 8 境内	
不動院	入野村		0, 0, 5, 19 境内	
真福寺	熊川村		0, 1, 9, 14 境内 公義除地 1, 0, 0, 20 畑 地頭除地 0, 1, 0, 8 畑 伊勢神明同上	享和3年の張り紙すべて公義除地
大行寺	草花村	20石 内13石寺領 7石小宮大明神	0, 4, 4, 18 田畑 内 1, 4, 0 八幡宮 1, 6, 0 稲荷宮 1, 2, 0 伊勢明神 0, 2, 12 奈良明神 1, 2 川欠荒地	
真照寺	引田村	7石		
無住				
東光寺	川口村			切畑内
法仙寺	草花村			見捨地
円秀寺	川口村			見捨地
正音寺	引田村			真照寺内
円能寺	草花村			大行寺宮社内
福寿寺	川口村			円福寺内
清鏡寺	川口村			円福寺内

表6 明珠院F26-3-①寛延4年「明珠院付畑帳」

地目	面積	水帳奥書	分米	取永	口永
御除地畑	7畝14歩	明珠院			
屋敷	1畝2歩	利右衛門	1斗7合	14文8分	4分4厘
上畑	3畝18歩	八兵衛	2斗5升2合	38文9分	1文2分
上畑	2畝10歩	利右衛門	1斗5升2合	25文2分	7分5厘
上畑	1畝6歩	明珠院	8升4合	13分	3分9厘
上畑	5畝19歩	明珠院	3斗9升4合	60文8分	1文8分
年貢地高9斗9升3合此反別屋敷1畝2歩上畑1反2畝23歩ノ取永157文2分8厘但口永共					
内ぞふし原上3畝前々永引分米2斗1升取永32文4分但口永共					
残取永124文8分4厘					
上漆古高1盃但200目入只今兩度引下→本高へ平均200目1盃につき永80文6厘5毛					

表7 大悲願寺(吉祥院)門末一覧と由緒

寺院名	所在	本末	由緒
吉祥院	横沢村	本寺 朱	建久2年(1192)正月、観音堂平山季重祈願により草創、開山澄秀僧正(勝賢弟子)。建久3年後白河法皇追福大般若転読法要。延文5年(1360)大悲願寺中興、澄遍(年月不明准三后満濟より伝法灌頂)により本堂・吉祥院造立。応永4年(1397)足利氏満より秋留郷に20石(後、後北条氏より多西へ改めて寄付)。寛正2年(1461)旦那日奉朝臣小宮中務沙弥憲行大梵鐘納める。寛正3年本堂再造立。天正19年(1591)朱印状頂戴。
大行寺 真照寺 円福寺	草花 引田 川口	末寺 朱	建永2年(1207)草創祈願檀主平山季重、開祖隆豊上人。 延文元年(1356)薬師堂造立、大檀主鎌倉管主足利基氏公別当金蓮院。 承元4年(1210)草創、開山智賢法印。
大光寺 大仙寺	高尾 川口	新末寺 朱	明王院、文亀3年(1503)草創、開祖法泉坊秀等。 建暦2年(1212)草創、開基頼空法印。
成就院 真福寺 西蓮寺 宝蔵寺 正福寺	伊奈 熊川 戸倉 檜原 川口	新末寺	宝積寺、文明元年(1469)大悲願寺7世重賢退院の開山として開山。 応永5年(1398)開基秀重僧都(のち吉祥院へ転住六世)。 宝治2年(1248)草創、檀主高橋越後入道本光の祈願、開基安養寺隠居乗尊僧都。 建永2年宝蔵密寺(宝蔵寺)秋留・橋郷開発奉行因幡守平朝臣広元・平山季重願。 貞治3年(1364)金剛坊重円法印草創。
龍性院 法光院 地藏院 安養寺 不動院 法仙寺 東海寺 観音寺 明珠院 長福寺 東光寺 如意輪寺 泉蔵寺 一重院	伊奈 高尾 留原 小中野 五日市 草花 代継 檜原 檜原 檜原 川口 川口 川口 川口	門徒	天文10年(1541)大悲願寺10世有雅法印退院後の庵室。 宝治元年(1247)草創、開山大悲願寺3世秀海法印。天保14年(1843)再興。 富原村、天正2年(1574)開基愛染坊伝秀。 寛喜2年(1230)草創、開基乗尊法印。 文亀3年(1503)松原村に草創、檀主有作弾正・馬場日向開基、開山大悲願寺6世秀重 法船寺、文和元年(1352)草創。 弘安2年(1279)草創、開基檀主代継縫殿助。 正保3年(1646)草創、開山海俊法印(大悲願寺16世淳秀弟子)。 文禄3年(1594)栄印(大悲願寺12世源鏡弟子)草創。 永徳元年(1381)開基。享禄元年(1528)中興開基大悲願寺6世秀重。 延徳3年(1491)檀主滝島若狭守義雄造立、開祖尊祐。 永正16年(1519)草創。 天文3年(1534)草創。 永禄元年(1558)草創。



寺院名	所在	本末	由緒
円秀寺	川口		円照寺、文禄3年(1594)草創。
円能寺	草花	又門徒 大	寛正4年(1463)草創。
正音寺	引田	又門徒 真	天正17年(1589)草創檀主平山右衛門太夫。
清鏡寺	川口	又門徒 円	建武2年(1335)草創。
福寿寺	川口	又門徒 円	建武2年(1335)草創、檀主北嶋三河公。
観蔵院 真光院 東福院 千日堂	吉祥院寺中   伊奈		享徳2年(1453)草創。慶長8年(1603)檜原から吉祥院へ移す。

表8 大悲願寺(吉祥院)門末僧俗人数の変遷と檀家数

	所 在	享保6 1721		享保17 1732		宝暦6 1756		文化13 1816		文政5 1822		天保11 1840		嘉永5 1852		元治1 1864		年 本院無住 御取調帳 無住日時	欠 寺旦用	大悲願寺日記 檀家数	
		僧	俗	僧	俗	僧	俗	僧	俗	僧	俗	僧	俗	僧	俗	僧	俗				
本寺 朱末寺	吉祥院	4	8	15	2	12	5	9	5	7	3	4	2	5	2	4	2	2		約80	
	大行寺	2	3	3	2	7	3	2	3	4	2	3	1	2	2	2	1	2		50	
	真照寺	計	8	10	3	3	4	2	3	3	4	2	1	2	2	1	2	1		65~56	
新末寺 朱末寺	円福寺	2	3	3	2	3	2	4	3	1	1	2	1	1	1	1	2	1		12	
	大光寺	2	3		2	3	1	2	3	1	1	1	1	1	1				天保11	円福寺	21~27
	大仙寺	2	4		2	3	1	2	1	1	1	1	1	1	m						12
	成就院	2	1		1	2	3	1	1	1	1	1	1	1	m						55
	真福寺	2	1		m	f	1	1	1	1	1	1	1	m		1	1				22~18
	西連寺	2	1		1	2	2	2	1	1	rd1	1	1	1	1	1			天保12	大光寺	28
門 徒	宝蔵寺	1			m	2	2	2	1	1	2	2	1	1	1	1					20
	正福寺	1			1	1	1	1		m	m	m	m	2							3
	龍性院	1			1	1	1	1		m	m	m	m					文政1	吉祥院	5	
	法光寺	2	2		1	2	1	1	rd1	2	m	m	m					文政6	大光寺	0	
	地蔵院	1	1		1	1	1	1		rd1	m	m	m					天保11	大光寺	2~3	
	安養寺	1	1		1	1	1	1	rd1	1	m	m	m								8~7
	不動院	1			1	1	1	1		m	m	m	m					天保10	吉祥院	0	
	法仙寺	m			m	m	m	m		m	m	m	m					享保4	大行寺	0	
	東海寺	1	2		1	1	f	1	1	1	1	1	1	r1				天保8	真照寺	不明	
	観音寺	1			1	1	1	1	1	1	m	m	m	m					文政2	宝蔵寺	17~16
	明珠院	1			1	1	m	m		m	m	m	m	m					寛延2	宝蔵寺	0
	長福寺	2			2	2	m	m		1	m	m	m	m					天保3	宝蔵寺	16~27
	東光寺	m			d1	m	m	m		m	m	m	m	m					寛政1	如意輪寺	1
	如意輪寺	1	1		2	1	1	1		m	m	m	m	m							20~0
	泉蔵寺	1			1	1	1	1		m	m	m	m	m					文政4	円福寺	不明
	一重院	2			r1	1	1	1		m	m	m	m	m					享保5	円福寺	0
	円秀寺	m			m	m	m	m		m	m	m	m	m					真享3	円福寺	不明
又門徒 大真円	草花寺	m			m	m	m		m	m	m	m	m					元和7	大行寺	不明	
	正音寺	m			m	m	m		m	m	m	m	m					不明	真照寺	35	
	清鏡寺	m			m	m	m		m	m	m	m	m					不明	円福寺	不明	
	福寿寺	m			m	m	m		m	m	m	m	m					不明	円福寺	不明	
吉祥院 中	観蔵院				m	m	m		m	m	m	m	m					寛永18	吉祥院	0	
	真光院				m	m	m		m	m	m	m	m					元禄17	吉祥院	0	
末庵	東福院				m	m	m		m	m	m	m	m					寛保3	吉祥院	0	
	千日堂	伊奈						d1		d1		d1									

※享保6年F1-6「寺社堂領高並御除地反別并人数帳」、享保17年F1-7「人数改之帳」、宝暦6年F1-11「人数御改帳扣」文化13年F1-28「人数御改書上帳」、文政5年F1-32「人別御改書上帳写」、天保11年F1-40「人別御改書上帳」、嘉永5年F1-48「人別御改書上帳」、元治元年F1-51「当院并門末人別役書上帳」、F1-62「大悲願寺日記」上263ページ(いつの檀家数か、出典不明)

※m=無住、r=留主居、d=道心、rd=留主居道心、f=不明

※円福寺は元禄13年に末寺昇格(F1-9)、真福寺・宝蔵院・大仙寺・大光寺・成就院・西連寺は天明2年に末寺昇格(F1-19など)正福寺は弘化3年に末寺昇格(F1-44)

表9 報恩講出仕人数の変遷

年 代		合計	弟子	新加	看住	隨身	留主	休	上京	備 考
宝暦11	1761	冬	22	12	1					不明1名
宝暦12	1762	夏	28	15	1	1	1			
宝暦13	1763	夏	27	15	3					
		冬	22	9				5		
宝暦14	1764	夏	24	11	1			1		
明和2	1765	夏	23		1					
		冬	28	15	1					
明和3	1766	夏	22	9						
明和4	1767	夏	26	12						
		冬	27							不参多く中止会下総人数書上
明和5	1768	夏	25	11		1	1	3		
		冬	21		2				4	休みは、「上京」のため
明和6	1769	冬	26	10	1	1	3	2	2	
明和7	1770	冬	25	8	1	1		2		
明和8	1771	冬	20	5		2				
明和9	1772	夏	25	3	1	1				
		冬	26		3					
安永2	1773	夏	22	8			2		4	
		冬	26		3					
安永3	1774	冬	26		2					
安永4	1775	夏	26					2		
安永5	1776	夏	23	7		2				
		冬	19							
安永6	1777	冬	22		1				4	
安永7	1778	夏	18							
		冬	16							
安永8	1779	冬	15			2		2	3	
安永9	1780	冬	15	4		2				
天明2	1782	夏	13	2			1			
		冬	19	2	1	1		2		
天明3	1783	冬	15					5		
天明4	1784	冬	20	4	3					
天明5	1785	冬	23		2					
天明6	1786	夏	20							
		冬	20		1					
天明7	1787	夏	19							
天明8	1788	夏	19		1					
		冬	21							
寛政元	1789	夏	17							
		冬	18					1	1	
寛政2	1790	冬	14		2			2		
寛政3	1791	夏								不作のため中止
		冬	11					2	4	
寛政4	1792	夏	16	4				1		
		冬	17		1					
寛政5	1793	冬	16		1					
寛政6	1794	夏								観音堂建立のため繁用につき中止

年	代	合計	弟子	新加	看住	隨身	留主	休	上京	備考
		冬	14					3		
寛政7	1795	夏	15					1		
寛政8	1796	夏	13							
		冬	9					3		
寛政9	1797	夏	14	1					1	
		冬	10					1	2	
寛政10	1798	夏	12							
		冬								少人数のため「座居」ですます
寛政11	1799	夏	10					2		
		冬	9						2	少人数のため「座居」法楽
寛政12	1800	夏	11					2		欠席に罰金
		冬	10						1	
享和元	1801	夏	10							少人数略式
		冬						3		法楽のみ
享和2	1802	夏	10							
享和3	1803	夏								灌頂などのため中止
		冬	10							
文化元	1804	夏	9							法楽のみ
		冬	18	3						
文化2	1805	夏	15					2	1	
		冬	16							
文化3	1806	夏	13							法楽のみ
文化4	1807	夏	9					2	1	
		冬	8					5		法楽のみ
文化5	1808	夏	8					4		法楽のみ
		冬	7					1	4	
文化6	1809	夏	5					6		何もせず退散、不参届け無し5名
		冬	14	1						
文化7	1810	夏	9					4		
文化8	1811	夏	9					1		
		冬								法楽のみ
文化9	1812	夏	10							
		冬								法楽のみ
文化10	1813	夏								法楽のみ
		冬	10							法楽のみ
文化11	1814	夏								法楽のみ
		冬								法楽のみ
文化12	1815	夏								法楽のみ
		冬	12	2						
文化13	1816	夏								法楽のみ
		冬	13	3						
文化14	1817	夏	9							「未衆入」3名
		冬	11							「未新加」3名
文化15	1818	夏	11							「未新加」3名
文政元	1818	冬	13	3						
文政6	1823	冬	3							「講役」のみ
文政8	1825	冬	18	3						
文政9	1826	夏	14							

新義真言宗田舎本寺大悲願寺とその門末に関する基礎的研究（日暮 義見）

年 代			合計	弟子	新加	看住	隨身	留主	休	上京	備 考
		冬	17								
文政10	1827	夏	13								法楽のみ
		冬	14	1							14人書上、結衆は12名
文政11	1828	夏	12								法楽のみ
文政12	1829										夏・冬法楽のみ
文政13	1830	夏	12	4							
天保4	1833	2	11	3							
天保9	1838	9	11					2			
天保13	1842	10	6					3			
弘化2	1845	冬	7								
弘化3	1846	夏	10								
弘化4	1847	冬	8								聴衆大悲願寺隠居ら
嘉永2	1849	夏	13	1				3			聴衆4名
嘉永4	1851	冬	11								
嘉永5	1852	冬	11	2							聴衆4名
安政2	1855	冬	11								
安政4	1857	冬	8					4			
万延元	1860	冬	13	4				1			聴衆4名
慶応4	1868	夏	8					3			

表 10 大悲願寺住持一覧

住持	生没年	事跡
開山 澄秀	? ~1222	下総の生、洛陽の人。建久2年(1191)平山季重の願いにより金色山大悲願寺観音堂を創建。
2世 頼重	? ~1255	
3世 秀海	? ~1273	宝治元年(1247)高尾村法光院を創建。
4世 澄遍	1327~1414	延文5年(1360)大悲願寺中興、満濟より授法(寺附法流の祖)。
5世 頼憲	1376~1438	
6世 秀重	? ~1457	応永5年(1398)に熊川村真福寺開山。または永徳元年(1381)檜原村長福寺開山とも。真福寺(長福寺とも伝わる)より転住し、宝徳元年(1449)退院。(宝徳元年に退院し、長福寺開山か)
7世 重賢	? ~1479	文明元年(1469)退院、在職20年。退院後成就院(宝積寺)開創。
8世 秀恵	1435~1499	
9世 恵伝	? ~1521	弟子秀等は、明王院開山、後、高尾村大光寺と合寺。
10世 有雅	? ~1551	馬場美濃守息。天文10年(1541)退院。龍性寺開創。
11世 源尊	1509~1568	上総出身。天文18年大行寺頼源へ授法。
12世 源鏡	1509~1594	上総出身。天正3年上人号をうける。弟子、栄印は檜原村明珠院開山。源清は半沢坊真福寺中興。伝秀は留原村地藏院開山。
13世 海譽	1555~1634	府中由木氏の生。父は天正18年八王子城で討死。江戸増上寺中興源誉は叔父。兄は天台宗府中安養寺で寂。
14世 源誉	1606~1635	伊奈村石川五左衛門息。
15世 秀雄	? ~1642	寛永12年入院。13年に中野宝仙寺へ移転。伊達輝宗息、伊達政宗舎弟とされる。
16世 淳秀	? ~1643	武州太田久下勝蔵院弟子。寛永7年智山4世元寿より授法。寛永13年(1636)入院、忍領成田一重院へ転住、秀隆を院代とし兼任。在職7年。
17世 濟養	1611~1670	高麗郡加治郷長田村細田仁左衛門息。熊川村半沢坊(真福寺)住海盛(大峯山修行中没)のもと学び、慶安3年智山の許状をもって入山。弟子に大行寺蓮誉、真照寺永存、大悲願寺18世信盛、19世養遍。
18世 信盛	? ~1698	大久野村羽生藤右衛門息、平山氏の末。小池坊に学び寛文4年(1664)入寺。延宝6年(1678)隠居、在職14年、隠居21年。弟子の了盛は甲州郡内藤尾村長田氏出身、真光院、大行寺住持を勤め24世如環の師。
19世 養遍	1628~1700	江州浅井郡丁野村脇坂氏の生。医家に生まれ20余年医術を学んだ後、発心し関東へ下向し濟養の導きを受ける。延宝6年(1678)小池坊15年の許状を持って入院。入院後2年で退院、高尾村本智院を閉室とし、醍醐山などで学ぶ。資堂金の基となる22両2分を施入。
20世 尊海	1639カ~1694	武州都筑郡小机領の生。同領谷本村東光寺より延宝8年養遍の招きで入院。元禄7年大病のため退院。在職14年。
21世 俊黄	? ~1713	都筑郡大場村の生。元禄2年小池坊13年で東下、同7年都筑郡荏田村法福寺より入院。元禄16年隠居し観蔵院へ。在職9年。

住持	生没年	事跡
22世 昇清	1661～1717	都筑郡荏田村の生。熊川村石川五右衛門母は親類。小池坊11年留学の後、元禄16年(1703)入院。
23世 融聖	1685～1732	高尾村落合氏の生。後黄弟子。享保2年入院。在職15年。
24世 如環	1695～1761	高尾村中村氏の生。宝永2年11才で得度。高尾村大光寺から享保18年(1733)入寺。後に豊山30世となる白心虚明の学問指導も行った。在職28年。
25世 鏡津	1711～1800	館谷村の生。如環の死により大光寺より入寺。天明5年(1785)隠居観蔵院へ移る。在職24年
26世 慈明	1745～1811	大久野村矢治氏の生。宝暦5年(1756)大光寺で得度。師に従い大悲願寺へ移り小池坊留学、虚明に学ぶ。天明5年に入院。文化7年隠居、在職25年。
27世 法明	1769～1817	大久野村佐久間氏の生。大悲願寺にて12才で得度。大久野村西福寺で住職を勤めながら江戸触頭弥勒寺役僧も兼務し、文化7年慈明の隠居にともない入院。文化14年(1817)隠居。在職7年
28世 恵宝	1790～1860	日野山本氏の生。足立郡栗原村満願寺より文化14年に弟子舜隆房韶恵とともに入院。嘉永3年(1850)退院。在職33年。
29世 恵鏝	1820カ～1863	大悲願寺にて10才で得度。天保7年(1836)大行寺看住、弘化5年(1848)住持。嘉永3年に大悲願寺入院。文久2年(1862)隠居。在職7年。
(恵澄)	1823～?	引田村馬場氏の生。安政4年(1857)正福寺に入院、文久2年大悲願寺入院、元治元年(1864)隠居。在職2年。明治2年(1869)神官。
(恵卓)	1842カ～?	入間郡内堀村入山氏の生。大行寺7才で得度。大悲願寺で加行。万延元年(1860)大行寺看住。元治元年入院。在職2年。
30世 明盛	1822カ～?	犬山県(彦根藩)士族赤田文六長男。弘化3年(1846)小池坊得度、豊山修学中に恵卓と師弟契約をし慶応2年(1866)入院。大仙寺慈光を院代とし、触頭弥勒寺役者を勤める。明治4年退院、江戸根生院へ転住。
31世 慈光	1842～1891	葛飾郡上口村堀切郡造(塩野姓、貴沢運三とも)次男。嘉永7年深川法乘院で得度、中野村慈眼寺、大仙寺などを経て、明治4年入院。明治18年深川法乘院と兼務。

※恵澄・恵卓は寺伝から除かれている。恵卓と明盛の生年は他の事例が見えるが、早いほうを記した。

表 11 「真言宗出家人別帳」 F1-21

所 属	名前	年齢	生 国
横沢村 吉祥院住	慈明	45	大久野村
横沢村 吉祥院隠居	鏤津	76	館谷村
横沢村 吉祥院弟子	義現	21	大久野村
横沢村 吉祥院弟子	真光	17	河原宿
横沢村 吉祥院弟子	千全	10	平井村
草花村 大行寺住	隆盛	43	檜原村
草花村 大行寺弟子	春玄	15	草花村
熊川村 真福寺住	靈山	35	留原村
代継村 東海寺住	実天	34	越後国高田
引田村 真照寺住	鳳瑠	50	熊川村
引田村 真照寺弟子	亮環	18	熊川村
引田村 真照寺弟子	周環	14	檜原村
川口村 円福寺住	光瑛	50	神戸村
川口村 円福寺弟子	環瑞	22	留原村
川口村 泉蔵寺住	禪了	46	川口村
川口村 大仙寺住	憲識	60	檜原村
川口村如意輪寺住	光鐸	27	川口村
川口村 正福寺留主居道心者	即現	62	川口村
川口村 東光寺留主居道心者	行阿	72	三州賀茂郡三河村
高尾村 大光寺住	堯英	74	大和長谷
高尾村 法光寺住	如玄	38	高尾村
五日市村不動院借住道心者	道意	35	平井村
小中野村安養寺住	柳啓	58	入間郡塩船村
盆堀村 西蓮寺隠居	弁妙	62	入間郡谷ヶ貫村
檜原村 観音寺住	円應	40	檜原村
檜原村 宝蔵寺住	真乗	46	高麗郡栗坪村
伊奈村 成就院住	津然	46	河辺村
伊奈村 成就院弟子道心者	彦心	50	伊奈村
伊奈村 成就院弟子道心者	是心	22	伊奈村
伊奈村 龍性寺住 学問ため他国	環津	33	川口村
吉祥院支配地蔵堂守道心者	是三	37	檜原村

※郡名の無いものはすべて埼玉郡



表 12 大悲願寺末寺・門徒の僧侶人体起立書

仮名・実名	出生	得度	加行・護摩	新加	灌頂	小池房留学	初法談	法躰・世寿	師範	備考
1 大鏡・義巖	多摩郡矢寺村 (入間市)	宮寺村(入間市)西勝院8才	同寺	村山(武蔵村山市)真福寺(寺領20石)	石神井(練馬区)三宝寺(寺領10石)	6カ年未許状	未勤	19年26才	山口(所沢市)前金乘院(寺領10石)	寛政8年2月旦中願ニ付伊奈村成就院住職
2 円了・如海	葛飾郡彦倉村 (三郷市)	同村延命院(除地2反8畝虚空藏縁日参詣者群衆)	同寺	下総国鱈ヶ崎村(流山市)東福寺(朱印地)	多摩郡彦成村(三郷市)円明院(朱印地10石)	4カ年未許状	未勤	19年30才	彦倉村延命院理随	寛政8年2月旦中願ニ付成就院留守居から無住檜原村長福寺へ移転
3 智證・長円	下総国香取郡小南村(東庄町)	同村増福寺14才	同寺	同寺	同寺	6カ年	未勤	18年31才	柚木村(青梅市)即清寺(寺領20石)	寛政10年9月檜原村旦中・西光寺願ニ付無住檜原村観音寺住へ
4 恵山・祐尊	越後国三嶋郡出雲崎	同所多聞寺8才	同寺	同寺	蒲原郡(西蒲原郡)国上寺(寺領150石)	4カ年未許状	未勤	34年42才	越後前多聞寺	享和2年2月旦中願ニ付伊奈村成就院住
5 大竜・本嵩	入間郡坊村	正楽寺村(所沢市)仏藏院(寺領7石)13才	同院	安永9年青梅金剛院	稲毛王禪院	6カ年許状	村山真福寺	25年38才	仏藏院有傳	享和2年4月旦中願ニ付代継村東海寺差上檜原村宝蔵寺へ移転
6 快心・大雅	信州諏訪郡上原村(茅野市)	桑原村(諏訪市)仏法寺(古くから真言宗道場)	同寺	同寺	小池坊	5カ年許状	仏法寺	27年35才	仏法寺大寂	享和3年11月旦中願ニ付檜原村長福寺住へ
7 春昶・浄円	多摩郡河津村	谷村(青梅市)真浄寺(塩船寺末3石)	同寺	成木村安楽寺(青梅市寺領10石)	小池坊	8カ年許状	安楽寺	34年43才	真浄寺浄目	文化14年11月檜原村宝蔵寺住被仰付
8 海龍・孔天	多摩郡今井村	塩船寺22才	川辺村(青梅市)東円寺(天寧寺末朱印地3石)	土浦東福寺(新治郡桜町カ)	水戸正道寺	3カ年未許状	未勤	28年50才	前塩船寺心海	文化2年10月旦中願ニ付盆堀村西蓮寺住へ
9 春全・浄譽	越後国羽羽郡小坂村	柏崎宿明蔵寺(柏崎市)	同寺	永徳寺(柏崎市)	豊山	10カ年	未勤	19年	明蔵寺性譽	文政6年2月旦中願ニ付小中野村安養寺住

	仮名・実名	出生	得度	加行・護摩	新加	灌頂	小池房留学	初法談	法薦・世寿	師範	備考
10	仰智・惠燈	多摩中藤村長右衛門五男	村山真福寺10才	同寺	同寺	多摩郡聖天院(日高市朱印地15石)	8カ年	未勤	22年31才		文政12年12月
11	勝永・秀清	江州彦根家中	西新井総持寺8才	同寺	同寺	成田新勝寺	11カ年	総持寺	20年28才	総持寺	文政8年2月西蓮寺無住二付住持被仰付
12	法教・慶道	江戸土井大炊守家来笠木清次郎悻	渋谷法如庵(本郷円満寺隠居所)8才	湯島円満寺	当院	染井西福寺(豊島区)	当年入衆		11年24才		文政11年9月川口村如意輪寺住被仰付
13	法全・恵明	多摩郡下柚木村嶋崎代蔵悻	当院16才	当院17才	当院17才	当院20才	当年入衆		5年20才		天保3年閏11月草花村大光寺住被仰付
14	戒如	多摩郡草花村藤左衛門悻	大行寺	本所弥勒寺	同寺	初瀬	13年		50年66才		天保4年12月草花村大行寺住被仰付
15	円精	多摩郡青木平村長右衛門悻(八王子市)	真照寺	同寺	当山	同寺	初登山		5年19才		天保5年12月代継村東海寺住被仰付
16	智雲・惠鏝	多摩郡奈良橋村佐平悻(東大和市)	当山19才	当山	当山	当山	4カ年		9年18才		天保7年9月大行寺看住職被仰付
17	観月・明蓮	麻布桜田町竹内寿仙悻	渋谷法如庵13才(12才)	当山	当山	当山	2カ年		7年19年		天保7年11月小中野安養寺住被仰付
18	鳳明	多摩郡堀之内村惣吉悻(八王子市)	平井村常福寺8才(日の出町春日社)	同寺	当山	八王子金剛院	4カ年		8年30才		天保7年11月川口村大仙寺住被仰付
19	融善	越後国蒲原郡能登村弥兵衛悻	四谷真成院21才(新宿区)	多摩郡中藤村真福寺	青梅村金剛寺		2カ年		3年23才		天保9年7月地藏院留守居
20	俊栄	信州更品郡八幡村吉原吉蔵悻	水内郡(はかり)村(?)安光寺	入間郡正楽寺村仏藏院	多摩郡村山真福寺	当山	4カ年		13年19才		天保9年11月盆堀村西蓮寺看住被仰付
21	本龍・玉明	多摩郡檜原郷大沢村次郎右衛門悻	都筑石川村満願寺(神奈川県緑区)	同寺	荏原郡六郷宝幢院	都筑恩田村徳恩寺(緑区寺願7石)	6カ年	都筑麻生郷玉禪寺(麻生区朱印地30石)	40年48才		天保12年熊川村真福寺住被仰付
22	定海・惠澄	多摩郡引田村馬場小瀬太悻	大悲願寺	同寺	同寺	塩船村塩船寺	7カ年		10年21才		天保14年8月真福寺住旦中願い二付被仰付

	仮名・実名	出生	得度	加行・護摩	新加	灌頂	小池房留学	初法談	法藤・世寿	師範	備考
23	智應・恵元	多摩郡二宮村（あきる野市）石川猶藏倅（清水殿御家従中村市重郎倅・神奈川県付属中村政次郎弟）	青梅村金剛寺12才戒師大悲願寺恵宝	大悲願寺弟子16才	金剛寺13才（ママ）	塩船寺16才（17才）	2カ年	2才	7年18才		天保15年11月円福寺看住被仰付
24	善了・胎全	陸奥国磐城湯長谷松本利兵衛3男	同村長徳寺13才	上黒田村満照寺（いわき市）	上遠野村円通寺（いわき市朱印地30石）	未	智積院7カ年未許状	未	14年36才		弘化3年11月且中願い二付檜原村宝蔵院住
25	円常・栄明	下総国海上郡銚子荒野村久右衛門倅	小浜村西安寺（銚子市）	多摩郡大幡村宝生寺	同	村山中藤真福寺	2カ年	未	13年30才		嘉永2年正月仙蔵寺住被仰付
26	明海・恵徳	相模国愛甲郡田名村喜右衛門倅（相模原市）	多摩郡川口村円福寺7才	塩船寺	中藤真福寺	塩船寺	7カ年	未	17年23才		嘉永3年3月円福寺無住ニ付住職
27	大進・恵門	紀州室郡田辺長尾村又三郎倅	入間郡勝楽寺村仏蔵院	中藤村真福寺	同	多摩郡星ヶ谷村真浄寺（青梅市）	4カ年	未	13年46才		嘉永3年宝蔵院住被仰付
28	秀雅・宥恵	入間郡所沢村三之助倅	青梅村金剛寺	当院	金剛寺	塩船寺	10カ年	未	15年27才		嘉永6年9月真照寺看住被仰付
29	舜龍・本然	尾州名古屋大野村弥兵衛倅栄吉郎	上総国市原郡五井村龍善院15才（市原市）	同寺	同寺文政6年	豊山勸学院文政9年	9カ年入衆30才	匝瑳郡幸手村龍蔵院（野栄町）	34年48才	五井村龍善院盛順	嘉永7年正月大仙寺住職被仰付
30	仁寿・恵慶	讃州大門郡水道村酒尾彦助倅（大川郡大内町カ）	同村虚空蔵院11才（与田寺讃岐10カ寺の一つ）	同寺13才		同寺17才	野山12カ年	未	23年33才		嘉永7年3月東海寺住職被仰付
31	常輪・運恵	奥州仙台宮城郡城下川内杉本久助倅	同城下亀ヶ岡千手院（寺領70石）	同城下満福寺	同城下定禪寺（寺領10石）	武州沼田村恵明寺（寺領20石）	2カ年	未	14年27才		安政2年8月真福寺看住被仰付
32	恭成・恵振	加州家中栗山源左衛門倅	当山20才	当山	当山	案下松嶽村常福寺	2カ年	未	5年25才		安政5年7月安養寺看住被仰付

	仮名・実名	出生	得度	加行・護摩	新加	灌頂	小池房留学	初法談	法薦・世寿	師範	備考
33	清心・恵月	多摩郡八王子寺町山本萬五郎倅	当院8才	当院未大行寺	当山	松嶽村常福寺(八王子市寺領10石)	3才年	未	12年20才		安政7年2月大行寺看住被仰付
34	恵智・燈早	入間郡内堀村入山元右衛門倅	大行寺7才	当山	当山	松嶽村常福寺	4才年	未	13年19才		万延元年11月大行寺看住被仰付
35	真恭・秀恵	相州津久井県大堀村	高尾山薬王院10才	当山13才	同	未	2才年	未	8年17才		万延2年2月成就院看住被仰付
36	慈眼・良実	江戸内藤早川裏右衛門倅	遠州榛原郡発田村宝蔵院8才	同寺13才	高野山	宝蔵院	8才年	未	50年58才		文久2年3月東海寺看住被仰付
37	栄龍・盛然	忍領吹上村林善庵倅(吹上町)	本所弥勒寺18才	中山道笹田村満願寺19才	当院	当院	2才年	未	4年21才		文久2年8月大仙寺看住被仰付
38	智宣・恵察	多摩郡芋久保村伊助倅(東大和市)	当山13才	当山14才	当山16才		2才年		6年18才		元治2年3月正福寺開済
39	一道・宥舜	葛飾郡銜口地村忠右衛門倅	入間郡山口村金乗院8才	中藤真福寺14才	成木村安楽寺	未	4才年	未	23年31才		慶応4年3月代継村東海寺住職被仰付
40	玄隆・実信	下総国関宿 久世大和守家来佐々木源太夫倅	葛飾郡尾崎村威徳院	同	清水村金乗院	江戸谷中加納院	6才年	西新井総持寺	37年51才		明治2年9月成就院住職開済
41	良栄・智光	忍松平下総守家来新左右平倅	加美郡七本木村西福寺11才	同寺14才	大佐野村吉祥院14才	同寺18才	6才年智山	忍保村善台寺	21年31才		明治3年8月安養寺住職被仰付

表 13 大悲願寺門末内の僧侶移転状況

① 名 ② 出生 ③ 得度 ④ 加行・護摩 ⑤ 新加 ⑥ 灌頂 ⑦ 移転状況	① 大鏡 兼敏 ② 多摩郡大寺村 ③ 宮寺村西勝院8才 ④ 宮寺村西勝院 ⑤ 村山真福寺 ⑥ 石神井三寶寺 ⑦ 寛政8年 成就院26才	① 円了 如海 ② 葛飾郡彦倉村 ③ 彦倉村延命院 ④ 彦倉村延命院 ⑤ 下総国東海寺 ⑥ 多摩郡円明院 ⑦ 寛政8年成就院留主居 30才から長福寺 天保3年真福寺 天保8年真照寺	① 智証 長門 ② 下総国小南村 ③ 小南村増福寺 ④ 小南村増福寺 ⑤ 小南村増福寺 ⑥ 小南村増福寺 ⑦ 寛政10年観音寺31才
① 光鐸 ② 川口村 ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 寛政元年如意輪寺27才 寛政11年大仙寺	① 千全 成聖 ② 平井村 ③ 大悲願寺寛政元年10才 ④ 大悲願寺 ⑤ 大悲願寺 ⑥ ⑦ 寛政11年西蓮寺看住 享和3年堀金光英寺弟子	① 周環 玄津 ② 檜原村 ③ 真照寺寛政元年14才 ④ ⑤ ⑥ ⑦ 如意輪寺 寛政11年真福寺	① 大竜 本葛 ② 入間郡坊村 ③ 正楽寺村仏藏院13才 ④ 正楽寺村仏藏院 ⑤ 青梅金剛寺 ⑥ 桶毛王禪寺 ⑦ 寛政12年東海寺 享和2年宝蔵寺38才 文化4年石川村満願寺
① 真乘 ② 高麗郡粟坪村 ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 寛政元年宝蔵寺住46才 享和2年堀金光英寺	① 宝光 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 享和3年西蓮寺住 文化2年大光寺	① 快心 大雅 ② 信州諏訪郡上京村 ③ 桑原村仏法寺9才 ④ 桑原村仏法寺 ⑤ 桑原村仏法寺 ⑥ 小池坊 ⑦ 享和3年西蓮寺35才 文化元年安養寺	① 如玄 ② 高尾村 ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 寛政元年法光寺38才 文化2年真照寺
① 覚成 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 地藏院看住 文化3年隠察へ	① 致上 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 文化14年大仙寺 文政3年円福寺	① 専敬 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ 文化15年東海寺 文政10年真照寺	① 春全 浄譽 ② 越後国小坂村 ③ 泊崎宿明厳寺 ④ 泊崎宿明厳寺 ⑤ 永徳寺 ⑥ 豊山 ⑦ 文政6年安養寺 文政7年大仙寺
① 仰智 忠燈 ② 多摩郡中森村長右衛門5男 ③ 村山真福寺10才 ④ 村山真福寺 ⑤ 村山真福寺 ⑥ 靈天院 ⑦ 四ッ谷南寺町文殊院 文政7年東海寺移転31才	① 智雲 忠鏡 ② 多摩郡奈良橋村佐兵衛倅 ③ 大悲願寺9才 ④ 大悲願寺 ⑤ 大悲願寺 ⑥ 大悲願寺 ⑦ 天保7年大行寺看住18才 弘化5年大行寺30才	① 観月 明連 ② 麻布桜田町竹内寿仙倅 ③ 法如庵13才 ④ 大悲願寺 ⑤ 大悲願寺 ⑥ 青梅山金剛寺 ⑦ 天保7年安養寺19才 弘化5年真福寺31才 嘉永2年円福寺 嘉永6年大光寺36才	① 本龍 玉明 ② 多摩郡大沢村次郎右衛門倅 ③ 都築郡石川村満願寺 ④ 都築郡石川村満願寺 ⑤ 江原郡六郷宝幢院 ⑥ 都築郡恩田村徳恩寺 ⑦ 石川村満願寺 天保12年真福寺48才
① 定海 恵澄 ② 引田村馬場小源太倅 ③ 大悲願寺 ④ 大悲願寺 ⑤ 大悲願寺 ⑥ 塩船村塩船寺 ⑦ 天保14年真福寺21才 安政4年正福寺35才	① 智應 恵元 ② 多摩郡二之宮村石川猶藏倅 ③ 青梅村金剛寺12才 ④ 大悲願寺16才 ⑤ 金剛寺13才 ⑥ 塩船寺16才 ⑦ 天保15年円福寺看住18才 弘化4年円福寺21才 嘉永3年大光寺24才 文久3年真福寺37才	① 円常 栄明 ② 下総国銚子荒野村久右衛門倅 ③ 小浜村西安寺 ④ 多摩郡大幡村宝生寺 ⑤ 多摩郡大幡村宝生寺 ⑥ 村山中藤真福寺 ⑦ 嘉永2年仙蔵寺30才 嘉永3年西蓮寺	① 秀雅 有恵 ② 入間郡所沢村三之助倅 ③ 青梅村金剛寺 ④ 大悲願寺 ⑤ 金剛寺 ⑥ 塩船寺 ⑦ 嘉永6年真照寺看住27才 安政2年真照寺30才
① 舜龍 本然 ② 名古屋大野村弥兵衛倅 ③ 上総国五井村龍善院15才 ④ 上総国五井村龍善院 ⑤ 上総国五井村龍善院文政6年 ⑥ 豊山勸学院文政9年 ⑦ 天保15年幸手村龍藏院住 嘉永7年大仙寺48才	① 真恭 秀恵 ② 相州大堀村 ③ 高尾山薬王院10才 ④ 大悲願寺13才 ⑤ 大悲願寺 ⑥ ⑦ 万延2年成就院看住17才 慶応2年大光寺22才	① 栄龍 盛然 ② 忍領吹上村林善庵倅 ③ 本所弥勒寺18才 ④ 中山道龍田村満願寺19才 ⑤ 大悲願寺 ⑥ 大悲願寺 ⑦ 大仙寺看住21才 大行寺26才	① 玄隆 実進 ② 下総国関宿久世和守家 来佐々木源太倅 ③ 葛飾郡尾崎村成徳院 ④ 葛飾郡尾崎村成徳院 ⑤ 清水村金乗院 ⑥ 江戸谷中納納院 ⑦ 板橋宿観明寺香衣一色伏成 成就院51才

A concrete research on the Dai-Higan Temple (Singi Singon sect)  
and its branches

HIGURASHI, Yoshiaki

The purpose of this thesis is to introduce the basic data in relation to the Dai-Higan Temple and its branches. In other words to introduce and examine the special characteristics of the Dai-Higan Temple and its branches (禰加 matuji, 毘陀 monto) in the Komiyaryo area (modern Tokyo, Akiru city) and their dispersion.

In addition, to examine the lives of the priests that belonged to the branches of the Dai-Higan Temple from the Kansei era (1789) until the end of the Shogunate (1868).

In addition to the points mentioned above, it is my intention to show the following: 1) Many branch temples did not have a priest residing permanently. 2) The priests of the small temples belonging to the Dai-Higan Temple were constantly moving from one temple to another without limiting themselves to branches of the Dai-Higan temple. 3) The parishioners belonging to many branch temples of the Dai-Higan Temple were below 20 people. This was close to the average number of parishioners in Komiyaryo area. Therefore since the examination of the branches of the Dai-Higan temple has similarities with other areas in Japan the analysis of the Dai-Higan temple can assist us in forming a solid base for future research.

(人文科学研究科史学専攻 博士後期課程一年)